

五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第23集

MZ 6号窯跡

隠川(1)遺跡内の須恵器窯跡発掘調査報告書

五所川原市教育委員会



卷頭図版2 MZ 6号窯遠景



卷頭図版1 MZ 6号窯完掘状況



卷頭図版 3 窯体内遺物出土状況



卷頭図版 4 壁面断割状況

序 文

五所川原市では平成10年度より五所川原須恵器窯跡発掘調査整備活用検討委員会を設置して、市の東方に所在する須恵器窯跡群の調査を実施してまいりました。

本報告書は平成13年度にその調査の一環として行われた、五所川原市持子沢地区の窯跡の発掘調査をまとめたものです。

調査の結果、須恵器の窯跡の構造、出土遺物の様相が明らかになり、須恵器操業開始時期である持子沢窯跡支群の須恵器生産の一端を捉えることができました。

本報告書が、今後の埋蔵文化財の保護と研究にいささかなりとも役にたてれば、幸いです。

最後になりましたが、この調査に協力していただいた学生の皆様をはじめ、種々のご指導、ご協力いただいた関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

五所川原市教育委員会

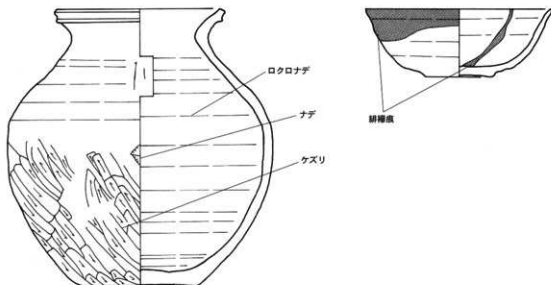
教育長 原 田 信 夫

例 言

- 1 本報告書は平成13年度に実施した五所川原市持子沢地区に所在する隠川（1）遺跡の調査報告書である。
- 2 本遺跡の遺跡番号は、05020番である。
- 3 試料の鑑定・分析については次の機関に依頼した。
炭素14年代測定、炭化材の樹種同定 (株)バリノサーヴェイ
- 4 出土遺物・実測図・写真等は、現在五所川原市教育委員会で保管している。
- 5 発掘及び本報告書の作成にあたり、次の機関及び方々から御協力・御助言を頂いた。ご芳名を記し、感謝申し上げる次第である（敬称略、アイウエオ順）。
岡村 道雄、工藤 清泰、小松 政夫、坂井 秀弥、関根 達人、茅野 嘉雄、西村 康、藤田 直行、藤沼 邦彦、三浦 圭介、村越 潔

凡 例

- 1 本報告書の依頼原稿については文頭に示した。
- 2 引用、参考文献については、本文末に収めた。文中に引用した文献名については、著者名（編者名）と西暦年で示した。
- 3 土色の色調は「新版標準土色帖」（小山・竹原 1967（1988年度版））に準じた。また遺構内埋土の層序にはアラビア数字（1・2・3・・・）を使用した。
- 4 窯跡の方位、縮尺は図面ごとに示した（縮尺不同）。
- 5 窯跡内出土の遺物に関しては、その出土地点を平面図に図示した。
- 6 出土遺物は原則として縮尺3分の1とした。
- 7 遺物の個体数のカウントは主として口縁部、底部の破片数を算出し、破片数の多い部位の破片数を個体数とする最小個体数法を使用している（口縁部、底部破片が同一のものは1とした。）。
- 8 土器実測図において使用した各種調整技法の表現方法は第1表に示したとおり基本的に青森県埋蔵文化財調査センターの表現方法を踏襲した。



第1表 各種調整技法

【本文目次】

第1章 調査に至る経緯と調査要項	1
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査要項	
第2章 調査の方法と調査の経緯	2
第1節 調査の方法	
第2節 調査の経緯	
第3章 遺跡周辺の環境	5
第4章 調査の結果	14
第1節 MZ6号窯	
第2節 出土遺物	
第5章 自然科学分析	27
第6章 まとめ	30

【隠川(1)遺跡図版目次】

第1図 グリッド配置図	2
第2図 隠川(1)遺跡周辺の遺跡地図	6
第3図 五所川原須恵器窯跡位置図	10
第4図 MZ6号窯検出状況	15
第5図 B窯遺物出土状況・焼成状況	16
第6図 MZ6号窯の器種組成	17
第7図 坏の外傾指数の算出方法	18
第8図 隠川(1)遺跡出土遺物(1)	19
第9図 隠川(1)遺跡出土遺物(2)	20
第10図 隠川(1)遺跡出土遺物(3)	22
第11図 長頸壺の外傾指数の算出方法	23
第12図 広口壺の外傾指数の算出方法	23
第13図 隠川(1)遺跡出土遺物(4)	24
第14図 隠川(1)遺跡出土遺物(5)	25
第15図 隠川(1)遺跡出土遺物(6)	26
第16図 MZ6号窯・MD6号窯・MD4・5号窯出土須恵器の器種組成比	31
第1表 各種調整技法	
第2表 隠川(1)遺跡周辺の平安時代以降の遺跡一覧	7
第3表 須恵器窯跡編年試案	31

第4表	遺物觀察表(1)	33
第5表	遺物觀察表(2)	35
第6表	遺物觀察表(3)	37
写真図版		41

第1章 調査経緯と調査要項

第1節 調査に至る経緯

平成8年度に発掘調査が行われた犬走(3)遺跡(五所川原市教育委員会 1998)を契機として、平成10年度より、五所川原市教育委員会では五所川原須恵器窯跡群発掘調査整備活用検討委員会を設置して、須恵器窯跡の分布調査を実施してきた。その調査の一環として、①五所川原須恵器窯跡群の中でも操業開始時期に近い窯跡であること、②持子沢窯跡支群の須恵器の資料の確保という2点の理由から平成13年7月23日から狼野長根公園内に所在する隠川(1)遺跡内のM.Z 6号窯の調査を開始した。

第2節 調査要項

- | | |
|------------|--|
| 1 調査目的 | 操業開始時期に近いM.Z 6号窯を調査することにより、操業開始時期の須恵器生産の様相を把握するとともに須恵器窯跡の保存・活用に供する。 |
| 2 発掘調査期間 | 平成13年7月23日(月)から同年8月28日(火)まで |
| 3 遺跡名及び所在地 | 隠川(1)遺跡(M.Z 6号窯)(青森県遺跡番号05-062)五所川原市持子沢字隠川695-4 |
| 4 調査対象面積 | 320平方メートル |
| 5 調査担当機関 | 五所川原市教育委員会生涯学習課 |
| 6 調査協力機関 | 文化庁、青森県教育庁文化財保護課、弘前大学、五所川原第二中学校、青森県立五所川原東高等学校 |
| 7 調査員等 | 調査指導員 村越 潔 青森大学教授(考古学)(検討委員)
藤沼 邦彦 弘前大学教授(考古学)(検討委員)
小松 政夫 秋田市教育委員会(検討委員)
西村 康 独立行政法人 奈良文化財研究所(検討委員)
工藤 清泰 浪岡町教育委員会(検討委員)
三浦 圭介 青森県教育庁文化財保護課
坂井 秀弥 文化庁文化財部記念物課
調査員 原田 信夫 五所川原市教育委員会教育長
調査担当者 五所川原市教育委員会
生涯学習課 課 長 川村 喜代一
課長補佐 柴谷 和夫
係 長 佐藤 文孝
主 事 藤原 弘明
調査補助員 工藤 輝美
太田 真太郎
坂本 光太郎 |

第2章 調査の方法と調査の経緯

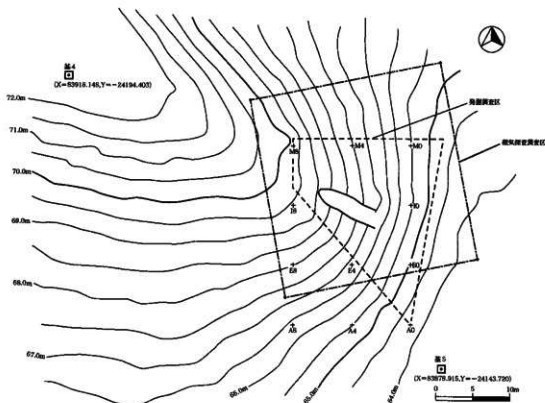
第1節 調査の方法

グリッドの設定 調査区内におけるグリッドは、1グリッドを2m×2mに設定し、遺跡地内に設置した基準点杭No.5より北に5.8m、西に2.8mを原点(A0)とした。また各グリッドには東西線の西から東に向かってアルファベット1文字(A・B・C・・・)、南北線の南から北に向かって算用数字(-1・0・1・2・・・)を付した。グリッドの呼称は南西隅の交点を使用することにした(第1図)。

竈跡・灰原の精査 竈跡が検出された時、竈の中軸線に対して平行に1本、垂直方向に4本セクションベルトを設置して埋土の堆積状況を確認しながら精査を行った。また灰原は平面的に範囲を確認した後、竈跡の中軸線上に設置したセクションベルトを灰原部分まで延ばし、埋土の堆積状況を確認しながら精査を行った。土層の名称は青森県埋蔵文化財センターの例に倣い、基本的に上位から下位に、左から右に算用数字を付すことにした。

実測図の作成 竈跡の形態、竈跡内の堆積状況、竈跡内及び灰原の出土遺物の出土状況や出土地点は、水系方眼地張り測量もしくは遭り方測量及びトータルステーションによって行った。図面の縮尺は原則として20分の1を使用した。遺物の微細測量は10分の1を用いた。

写真撮影 竈跡及び灰原の土層の堆積状況(セクションベルト)、遺物の出土状況、竈跡の完掘状況を中心に撮影し、その他必要に応じて、竈跡の確認面、調査状況などについても記録撮影を行った。使用したカメラはニコンのFM2、AF70を使用し、フィルムはモノクロ、カラーリバーサル、ネガカラーの3種を使用した。



第1図 グリッド配置図

第2節 調査の経緯

7月23日 午前中より、芝生及び表土の除去を行う。芝生の下から地山の土が出てきたため、そこで止めて、同一面上で窯跡の確認を行うが、検出されなかった。午後より検討委員である浪岡町教育委員会の工藤清泰氏の指摘により、地山と思われたものが、盛土であることが判明し、さらに掘り下げると、窯のプランが磁気探査で確認されていた場所から検出された。最後に確認面をタワーから撮影して本日の作業は終了した。

7月24日 午前中は窯跡確認面にてセクションベルトを設定し、窯跡内を10の小トレンチに分割して、遺構内の掘り下げを開始する一方で、窯跡下方に広がる灰原の精査を行った。最後に作業風景を撮影して本日の作業は終了した。

7月25日 五所川原第二中学校の先生、生徒47人に発掘調査の体験学習をしていただいた。生徒達に灰原部分の発掘をしていただき、堆積層の発掘方法、遺物の検出、遺物の残し方を学んでいただいた。本日は生徒にすべての作業員、補助員を要したため、窯跡内の調査は行わず、灰原のみの作業に終了した。

7月26日 青森県立五所川原東高等学校の先生、生徒23人に発掘調査の体験学習をしていただいた。生徒達に灰原部分の発掘をしていただき、堆積層の発掘方法、遺物の検出、遺物の残し方を学んでいただいた。本日も生徒にすべての作業員、補助員を要したため、窯跡内の調査は行わず、灰原のみの作業に終了した。

7月27日～30日 窯跡内の掘り下げと灰原部分の精査を行った。灰原部分では必要であると考えられる遺物についてはトータルステーションにより点取りを行った。窯跡内では各トレンチにおいて天井崩落土と考えられる窯壁が検出されたため、出土状況の写真撮影を行う。最後に本日の作業経過を撮影して終了した。

8月1日～2日 天井崩落土を除去した後、南北ベルトの写真撮影を行い、堆積状況を記録した後、東西ベルトを残して除去した。同時に灰原部分の遺物の検出、点取りを行った。

8月3日 検討委員である弘前大学教授藤沼邦彦氏の指導の下、南北のセクションベルトを除去した後、東西のセクションベルトを残して、床面まで掘り下げた。床面より大甕の体部破片が出土した。また検討委員である秋田市教育委員会の小松正夫氏には窯構築の際の懸架材に関してご指導していただいた。午後11時より弘前大学教育学部の学生が県文化財保護課の三浦圭介氏、同大学斉藤教授の授業の一環として、発掘調査に参加し、灰原部分に入っていた遺物の検出を行った。

8月6日 東西ベルトの写真撮影、堆積状況の実測を行った後、遺物の出土に注意しながら、ベルトの除去を行った。

8月7日～8日 藤沼邦彦氏指導の下、床面の検出に努めた。床面直上に堆積している砂質の堆積土を、刷毛で掃きながら除去する作業を行う。その際砂質堆積土中に含まれる遺物はグリッド及びトレンチ名によって一括で取り上げ、床面に帰属する遺物のみを実測した。そして最終的に作業を行った窯の床面が検出され、写真撮影の後、平面図を実測した。8日午後より、検討委員である青森大学教授村越潔氏、工藤清泰氏が視察に見られ、ご指導していただいた。燃焼部の最終床面に東西軸にベルトを残して、掘り下げると最初に構築された床面が検出された。その床面の直上には黒色土が厚く堆積しており、黒色土中に炭化材が検出されたために、写真撮影を行った後、年代測定・樹種同定の分析資料として取り上げを行った。この黒色土は床面を新しく構築する際に人為的に入れたものであり、自然堆積ではないものと考えられた（水はけを良くす

るために敷いているものと考えられる)。その際補強するために丸材を並べて敷いているものではないかと考えられる(水沢市教育委員会 伊藤博幸氏の助言による)。

8月9日 午前中は竈内の遺物の実測及び取り上げと灰原部分の遺物の検出を行っていたが、雨天の為午後より、遺物の水洗いを行う。午後2時に文化庁岡村道雄主任調査官、五所川原市長、助役、教育長が現場を視察し、今後の保存活用に関してご指導していただいた。

8月10日 竈跡の平面図の実測並びに、断面のエレベーション、調査区全体の平面図の実測を行った後、全体のクリーニングをして、最終床面の状況の写真撮影を行った。

8月11日 午前中に竈跡の最終床面の検出状況の写真撮影を行った後、午後より行われる現地説明会の準備を行った。午後1時より現地説明会を行った後、片づけを行い終了した。

8月17日 検討委員である独立行政法人奈良文化財研究所の西村康氏に発掘現場を視察していただき、今後の保存活用についてご指導していただいた。また竈の完掘状況の写真撮影を大判のカメラで撮影していただいた。

8月20日 灰原部分のセクションの写真撮影、堆積状況の実測を行った後、遺物に留意しながらベルトを外した。当初灰原と考えられていた層は重機によって押された攪乱層であることが判明し、灰原層はわずか数センチのみ残存している状況であった。竈跡内では燃焼部の最初の床面まで掘り下げた。

8月21日 竈跡の完掘状況の写真を撮影するために調査区内のクリーニングを行った後、写真撮影を行う。

8月24日 竈跡内の壁面の断ち割を行い、補修状況を確認した。また燃焼部の床面の断ち割もを行い、床面の構築状況を観察した。同時に竈跡部分を残して発掘区の埋め戻し作業を行う。午前中に文化庁坂井秀弥調査官、県文化財保護課工藤大班長に視察していただき、今後の竈跡群についての調査方法についてご指導していただいた。

8月28日 竈跡内の埋め戻し作業を行う。竈体内には土嚢袋に砂をつめたものにより、埋め戻し作業を行った後、機材の搬出作業を行い、発掘作業の全日程を終了した。

第3章 遺跡周辺の環境

隠川(1)遺跡は五所川原市大字持子沢字隠川695-4外にあり、五所川原市街地から南西へ約10キロメートル地点、狼野長根公園内に位置する。この遺跡の立地する前田野目台地は津軽半島の脊梁部をなす津軽山地の南西端を占め、高度60~110mの高位段丘面では等高線の間隔が粗く、頂部付近は平野部に続く緩傾斜面があるが、狼野長根公園東部を流れる前田野目川支流の開析により、等高線の間隔が密で谷壁が急峻となっており、非常に起伏の富んだ地形である。また、この高位段丘を構成する主要層が前田野目層(軽石質砂、シルト、粘土で構成された薄成層)であり、この粘土層を利用して須恵器を制作していたものと考えられている。隠川(1)遺跡周辺には多数の遺跡が存在するが、ここではこの遺跡と関連の深い9世紀末~10世紀にかけての遺跡について概観していくことにする。

津軽地方では、9世紀の後半から遺跡の数が急激に増加していく。ここで隠川(1)遺跡周辺の平安時代以降の遺跡地図を第2図、第2表に示す。これによると当遺跡周辺における遺跡の分布密度の高い場所は、前田野目台地の中でもGTⅡ面と呼ばれている標高30~40mの中段丘上であり、その縁辺部をなぞるように遺跡の分布がみられる(水野・堀田 1983)。この理由として中段丘面は平坦部もしくは緩斜面であるため、集落を営むには適している場所であると考えられる。また近年の津軽自動車道に伴う発掘調査により、当地域の遺跡の様相が判明してきている。主要な遺跡としては、平安時代の墓域と考えられる円形周溝を検出している野尻(2)・(3)遺跡や、外周溝や付属施設をもつ住居跡を検出した隠川(3)・(4)遺跡や野尻(3)遺跡、土器製作を行っていたと考えられるロクロピットをもつ住居跡を検出した隠川(2)・(4)・(12)遺跡、集落全体を環濠で囲んだ高屋敷館遺跡などの大規模な集落が各地で営まれることになる。

この周辺の集落では、生活用具として須恵器の占める割合が他の地域と比べて圧倒的に多く、かつ器種も多いことが特徴である。平安時代の遺跡で須恵器が出土していない遺跡は数少ないが、その中でも非常に多くの須恵器を出土している遺跡をあげると、隠川(2)・(3)・(4)・(12)遺跡、山本遺跡、山元(2)・(3)遺跡、水木館遺跡、高屋敷館遺跡などがある。また、須恵器生産と関係が深いと考えられる壺んだ須恵器が出土している遺跡として実吉遺跡があり、住居跡内から窯壁片が出土している遺跡として隠川(4)・(12)遺跡、川崎遺跡などがある。このことから五所川原須恵器窯跡群は、操業当初周辺の集落を対象として須恵器の生産を開始したのと考えられる。

五所川原須恵器窯跡群は平成10年度からの分布調査により、現在までに37箇所の窯跡が発見されている。当窯跡の立地状況は、標高30~210mの前田野目川の支流にのびる小谷に挟まれた小さな尾根上の斜面を利用して築窯されており、一箇所につき1基というのが基本となっており、砂田D遺跡や桜ヶ峰(1)遺跡のように2基隣接して築窯されているものを除けば、まとまって築窯されることがないのが特徴である。

第3図に窯跡の位置図を示したが、これによると4つの支群に分類が可能である。すなわち持子沢窯跡支群(MZ支群)、前田野目窯跡支群(MD支群)、原子窯跡支群(HK支群)、桜ヶ峰窯跡支群(SM支群)である。以下各支群別に個別の窯跡について現在までに判明している結果について述べていくことにする。



第2図 隠川(1)遺跡周辺の遺跡地図
 (本図は国土地理院平成8年修正・青森西部を複製したものである。)

第2表 隠川(1)遺跡周辺の平安時代以降の遺跡一覧

No.	遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	時代	備考	参考文献
1	05001	眞喜森山	五所川原市松野本字花笠	散布地	平安		
2	05006	中子	五所川原市松野本字中子	散布地	平安		16
3	05002	観音林	五所川原市松野本字花笠	集落跡、館跡	平安、中世		9,14,16
4	05042	神山館	五所川原市神山字巻野	館跡、散布地	平安、中世、近世		16
5	05045	巻野	五所川原市神山字巻野	散布地	平安		16
6	05025	塚山	五所川原市神山字塚山	散布地	平安		16
7	05007	野東	五所川原市神山字塚山ノ原	散布地	平安		16
8	05053	田了ノ浦	五所川原市豊成下田字ノ浦	散布地	平安		16
9	05083	松代	五所川原市松代元字松代	散布地	平安		16
10	05004	原了源池(1)	五所川原市原了元	集落跡	平安		7,8,16
11	05039	原了源池(4)	五所川原市原了元	散布地	平安		16,27
12	05006	原了城	五所川原市原了元	城跡跡	中世		16,21
13	050新	紅葉遺跡	五所川原市原了元紅葉	塚跡、集落跡	平安		
14	05010	山道源池	五所川原市原了元	塚跡、散布地	平安		16
15	05051	犬走(1)	五所川原市前田野目字犬走	散布地	平安		16
16	05061	犬走(2)	五所川原市前田野目字犬走	散布地	平安		16
17	05091	犬走(3)	五所川原市前田野目字犬走	塚跡	平安		16,22
18	05017	鶴ノ沢原	五所川原市前田野目字鶴ノ沢	塚跡	平安		1,16
19	05013	砂田C	五所川原市前田野目字前田野目山	塚跡	平安		2,16
20	050新	野館	五所川原市前田野目字野館	塚跡	平安		
21	050新	前田野目山(1)	五所川原市前田野目字前田野目山	塚跡	平安		
22	050新	前田野目山(2)	五所川原市前田野目字前田野目山	塚跡	平安	2基の塚跡	
23	050新	前田野目山(3)	五所川原市前田野目字前田野目山	塚跡	平安		
24	050新	前田野目山(4)	五所川原市前田野目字前田野目山	塚跡	平安		
25	050新	前田野目山(5)	五所川原市前田野目字前田野目山	塚跡	平安		
26	050新	砂田G	五所川原市前田野目字砂田	塚跡	平安		
27	050新	砂田F	五所川原市前田野目字砂田	塚跡	平安		
28	05011	砂田B	五所川原市前田野目字砂田	塚跡	平安	3基の塚跡	1,16
29	05014	砂田D	五所川原市前田野目字砂田	塚跡	平安	2基の塚跡	6,12,16
30	05008	川崎	五所川原市前田野目字川崎	散布地	平安		
31	05043	眞喜館	五所川原市前田野目字眞喜館	館跡	平安、中世		16,24
32	05009	桜ヶ峰(1)	五所川原市前田野目字桜ヶ峰	塚跡、散布地	平安	2基の塚跡	3,16,38
33	05060	桜ヶ峰(3)	五所川原市前田野目字桜ヶ峰	散布地	平安		
34	05019	狼野長塚	五所川原市持子沢字隠川	散布地	平安		
35	05020	隠川(1)	五所川原市持子沢字隠川	塚跡、散布地	平安		16
36	05062	隠川(2)	五所川原市持子沢字隠川	集落跡	平安、近世		16,35
37	05063	隠川(3)	五所川原市持子沢字隠川	集落跡	平安、近世		16,26
38	05064	隠川(4)	五所川原市持子沢字隠川	散布地	平安		16,31
39	05065	隠川(5)	五所川原市持子沢字隠川	散布地	平安		16
40	05066	隠川(6)	五所川原市持子沢字隠川	散布地	平安		16
41	05067	隠川(7)	五所川原市持子沢字隠川	散布地	平安、近世		16
42	05068	隠川(8)	五所川原市持子沢字隠川	散布地	平安		16
43	05070	隠川(10)	五所川原市持子沢字隠川	散布地	平安		16
44	05071	隠川(11)	五所川原市持子沢字隠川	散布地	平安		16,33,37
45	05072	隠川(12)	五所川原市持子沢字隠川	散布地	平安		16,31,33
46	050新	隠川(13)	五所川原市持子沢字隠川	塚跡	平安		
47	05018	持子沢館	五所川原市持子沢字隠川	館跡、散布地	平安、中世		16
48	05021	持子沢A	五所川原市持子沢字隠川	塚跡	平安		2,16
49	05022	持子沢B	五所川原市持子沢字隠川	塚跡	平安		2,4,16
50	05023	持子沢C	五所川原市持子沢字隠川	塚跡	平安		5,16
51	05024	持子沢D	五所川原市持子沢字隠川	塚跡	平安	3基の塚跡	
52	05073	隈無(1)	五所川原市羽野木沢字隈無	散布地	平安		16,29
53	05074	隈無(2)	五所川原市羽野木沢字隈無	集落跡	平安		16,29
54	05075	隈無(3)	五所川原市羽野木沢字隈無	散布地	平安		16
55	05076	隈無(4)	五所川原市羽野木沢字隈無	散布地	平安		16
56	05077	隈無(6)	五所川原市羽野木沢字隈無	散布地	平安		16,29
57	05079	隈無(7)	五所川原市羽野木沢字隈無	塚跡、散布地	平安		16
58	05080	隈無(8)	五所川原市羽野木沢字隈無	集落跡	平安、中世、近世		16
59	05085	実吉	五所川原市羽野木沢字実吉	散布地	平安		16,25
60	29048	大萩遺跡	浪岡町大萩遺跡前田	館跡	中世		
61	29001	早稲田	浪岡町穂了了早稲田	散布地	平安		
62	29049	山木	浪岡町穂了了山木	散布地	平安		13,36
63	29060	野尻(1)	浪岡町高屋敷字野尻	集落跡	平安		28,32,34,36
64	29061	野尻(2)	浪岡町高屋敷字野尻	集落跡	平安		19,23,36
65	29062	野尻(3)	浪岡町高屋敷字野尻	集落跡	平安		23,36
66	29063	野尻(4)	浪岡町高屋敷字野尻	集落跡	平安		23,36
67	29003	高屋敷館	浪岡町高屋敷館字野尻	集落跡	平安		30,36
68	29054	山元(1)	浪岡町杉沢字山元	散布地	平安		
69	29055	山元(2)	浪岡町杉沢字山元	集落跡	平安		18,36
70	29056	山元(3)	浪岡町杉沢字山元	集落跡	平安		17,36
71	29002	大萩堤	浪岡町長沼字藤原	散布地	平安		
72	29067	板橋野山遺跡	浪岡町杉沢字山元	散布地	平安		

73	29065	小阪橋池東	換岡町五本松字小阪橋・平野	敷布地	平安	36
74	29066	小阪橋池西	換岡町五本松字小阪橋・平野	敷布地	平安	36
75	29020	換岡城跡	換岡町換岡	館跡	平安	10,11,36
76	29050	川原御所	換岡町換岡字権井	館跡	平安、中世	36
77	29022	神林	換岡町北中野	敷布地	平安	
78	29004	下下平	換岡町旭	敷布地	平安	
79	29006	旭(2)	換岡町旭	敷布地	平安	
80	29059	寺屋敷平	換岡町吉野田字尚起	敷布地	平安	
81	29005	旭(1)	換岡町旭字木戸口	敷布地	平安	
82	29058	吉野田平野	換岡町吉野田字平野	敷布地	平安	36
83	29009	熊沢池	換岡町熊沢字村元	敷布地	平安	
84	29011	上野	換岡町藤山殿下上野	敷布地	平安	36
85	29012	神明宮	換岡町藤字杉田	敷布地	平安	
86	29051	銀懸	換岡町藤字杉田・上野	館跡	中世	
87	29015	大林	換岡町藤字杉田	敷布地	平安	
88	29058	杉田	換岡町藤字杉田	敷布地	平安	
89	29014	長瀬池	換岡町松枝字野尻	敷布地	平安	
90	29016	大沼	換岡町川倉字大沼袋	敷布地	平安	15,36
91	31002	福島	常盤村福島	敷布地	平安	
92	31001	水木館	常盤村水木字古館	集落跡、館跡	平安、中世	20
93	34007	五林平	飯橋町五林平字二宅	敷布地	平安	
94	34009	三宅館	飯橋町五林平字掘田	館跡	中世	
95	34006	平塚	飯橋町常南橋字平塚	敷布地	平安	

参考文献

- 五所川原市教育委員会 1968 『津軽・前田野日竊跡』 五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集
- 板詰秀一 1972 『津軽持子穴竊跡の調査』 『月刊考古学ジャーナル』 第75号
- 新谷武 1973 『板ヶ崎竊跡調査概報』
- 板詰秀一 1973 『津軽持子穴竊跡調査概報』 『北奥古代文化』 第5号
- 板詰秀一 1974 『津軽持子穴竊跡第2次調査概報』 『北奥古代文化』 第6号
- 村屋隆・新谷武 1974 『青森県前田野日砂田遺跡発掘調査概報』 『北奥古代文化』 第6号
- 青森県教育委員会 1974 『今別町浜名遺跡・中宇田遺跡・西田遺跡・五郎兵衛山遺跡・五所川原市原子溜池遺跡群発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第13集
- 五所川原市教育委員会 1974 『原子遺跡』 五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集
- 観音林遺跡研究会 1975 『観音林遺跡』
- 換岡町教育委員会 1978 『昭和52年度換岡城遺跡発掘調査報告書』
- 換岡町教育委員会 1979-89 『換岡城跡』 II-Ⅰ
- 新谷武 1981 『五所川原市周辺の須恵器産出地の長頸張について』 『弘前大学考古学研究』 第1号
- 青森県教育委員会 1983 『山木遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第105集
- 五所川原市教育委員会 1984-1992 『観音林遺跡』 五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書 第7-15集
- 換岡町教育委員会 1990 『大沼遺跡発掘調査報告書』 換岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 第15集
- 五所川原市編 1993 『五所川原市史 史料編Ⅰ』
- 青森県教育委員会 1994 『山元(3)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第159集
- 青森県教育委員会 1995 『山元(2)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第171集
- 青森県教育委員会 1995 『野尻(2)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第172集
- 青森県教育委員会 1995 『水木館遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第173集
- 五所川原市教育委員会 1995 『原子城跡』 五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書 第17集
- 五所川原市教育委員会 1995 『犬糸須恵器密跡発掘調査報告書』 五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書 第21集
- 青森県教育委員会 1996 『野尻(2)遺跡Ⅱ・野尻(3)遺跡・野尻(4)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第186集
- 五所川原市教育委員会 1996 『真吾館跡』 五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書 第19集
- 青森県教育委員会 1997 『実吉遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第207集
- 青森県教育委員会 1997 『隠川(3)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第210集
- 五所川原市教育委員会 1997 『原子溜池(4)遺跡・原子溜池(5)遺跡』 五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書 第20集
- 青森県教育委員会 1998 『野尻(1)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第234集
- 青森県教育委員会 1998 『隠無(1)遺跡・隠無(2)遺跡・隠無(6)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第237集
- 青森県教育委員会 1998 『高塚敷加遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第243集
- 青森県教育委員会 1998 『隠川(4)遺跡 隠川(12)遺跡Ⅰ』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第244集
- 青森県教育委員会 1999 『野尻(1)遺跡Ⅱ』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第259集
- 青森県教育委員会 1999 『隠川(11)遺跡Ⅰ 隠川(12)遺跡Ⅱ』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第260集
- 青森県教育委員会 2000 『野尻(1)遺跡Ⅲ』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第277集
- 五所川原市教育委員会 2000 『隠川(2)外遺跡発掘調査報告書』 五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書 第22集
- 換岡町史編纂委員会編 2000 『換岡町史 第1巻』
- 青森県教育委員会 2001 『隠川(11)遺跡Ⅱ』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第295集
- 青森県教育委員会 2001 『板ヶ崎(1)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第299集

持子沢窯跡支群

MZ 1号窯 持子沢A遺跡内に所在する窯跡で、奥溜池東岸丘陵斜面に位置し、標高は60mほどである。1972年10月に、立正大学の坂詰秀一氏が発掘調査を実施したが、燃焼部が水没していたため、未発掘に終わっている。その後平成12年の調査による溜池内を表採した結果、須恵器長頸壺、鉢、坏、甕が出土している。

MZ 2号窯 持子沢B遺跡内に所在する窯跡で、中溜池東岸丘陵斜面に位置し、標高は55mほどである。1972年10月に立正大学の坂詰秀一氏が発掘調査を実施している。その結果全長6.6m、焼成部最大幅1.3m、勾配は20～30度を測る半地下式の無階、無段の窯である。

出土遺物は長頸壺、広口壺、坏、甕であり、壺の頸部に「神」「見」などのヘラ記号が見られる。壺底部には菊花状文が見られるものもある。甕の叩き目の条数が単位あたり少ないことが特徴である。

MZ 3号窯 持子沢C遺跡内に所在する窯跡で、中溜池の西岸丘陵斜面にあり、標高は60mほどである。現況は畑地である。1973年10月8～18日に立正大学の坂詰秀一氏が発掘調査を実施している。その結果、全長9.4m、焚き口部幅1.9m、焼成部最大幅2.05m、勾配は20～30度を測る半地下式の無階、無段の窯である。

出土遺物は灰原より鉄製の斧、広口壺、坏、甕が出土している。

MZ 4号窯 持子沢D遺跡内に所在する窯跡で、奥溜池の北岸丘陵斜面に位置し、標高は60mほどである。現況は原野で狼野長根公園内となっている。未発掘の窯跡であり、平成11年度の表採により蓋が2点出土している。

MZ 5号窯 隠川（13）遺跡内に所在する窯跡であり、こわれ溜池北岸丘陵上に位置し、標高は70mほどである。現況は原野で狼野長根公園内となっている。平成10年度の分布調査により発見された。未発掘の窯跡であり、表採品として坏、甕破片が出土している。

MZ 6号窯 隠川（1）遺跡内に所在する窯跡であり、今回の発掘調査が行われた（省略）。

MZ 7号窯 限無（7）遺跡内に所在する窯跡であり、奥溜池西方の丘陵上に位置し、標高は75mほどである。平成10年度に土取りの際に発見され、灰原、焚き口部は破壊されていた。現況は原野である。

灰原の土が残存していたために平成10年度にその土中より遺物を表採する事ができた。その結果蓋、皿、坏、鉢、長頸壺、広口短頸壺、甕が出土している。

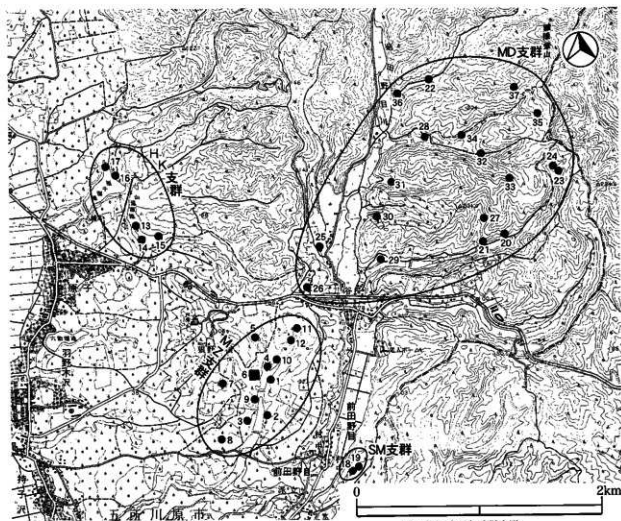
MZ 8号窯 隠川（10）遺跡内に所在する窯跡で、中溜池の西方丘陵上に位置する。現況は畑地であり、平成10年度の分布調査により発見された。

平成11年度の試掘調査により、窯尻部及び焼成部が検出されたが、重機により削平を受けており残存状況は悪いものと考えられる。出土遺物は皿、坏、長頸壺、甕である。

MZ 9号窯 持子沢C遺跡内に所在する窯跡で、中溜池北西方の丘陵上に位置し、標高は60mほどである。現況は山林で狼野長根公園内となっている。用水堰工事の際、焚き口部及び燃焼部の一部が破壊されている。

平成12年度の分布調査によって発見された。未発掘の窯跡で詳細は不明であるが、表採品として窯壁片、甕破片が出土している。

MZ 10号窯 持子沢D遺跡内に所在する窯跡で、奥溜池から北西にのびる丘陵斜面に位置し、標高は70mほどである。現況は原野で、狼野長根公園内となっている。平成10年度の分布調査により発見された。



持子沢 (MZ) 竊跡支群	
1	MZ1号竈 持子沢字蘆川1693
2	MZ2号竈 持子沢字蘆川1692
3	MZ3号竈 持子沢字蘆川1629-33
4	MZ4号竈 持子沢字蘆川1693
5	MZ5号竈 持子沢字蘆川1695-2
6	MZ6号竈 持子沢字蘆川1695-4
7	MZ7号竈 羽野木沢字榎畑240-24
8	MZ8号竈 持子沢字蘆川1629-18
9	MZ9号竈 持子沢字蘆川1696-97
10	MZ10号竈 持子沢字蘆川1695-4
11	MZ11号竈 持子沢字蘆川1695-4
12	MZ12号竈 持子沢字蘆川1695-4

原子 (HK) 竊跡支群	
13	HK1号竈 原子字山元278
14	HK2号竈 原子字山元278
15	HK3号竈 原子字山元278
16	HK4号竈 原子字紅葉279-1
17	HK5号竈 原子字紅葉279-1

板ヶ峰 (SM) 竊跡支群	
18	SM1号竈 前田野目字板ヶ峰66-4
19	SM2号竈 前田野目字板ヶ峰104-1

前田野目 (MD) 竊跡支群	
20	MD1号竈 前田野目字砂田51-67
21	MD2号竈 前田野目字砂田57-124
22	MD3号竈 前田野目山園有林
23	MD4号竈 前田野目字砂田51-64
24	MD5号竈 前田野目字砂田51-64
25	MD6号竈 前田野目字犬走48-3
26	MD7号竈 前田野目字犬走55-63
27	MD8号竈 前田野目字砂田57-125
28	MD9号竈 前田野目字野籾93
29	MD10号竈 前田野目字砂田34
30	MD11号竈 前田野目字砂田51-68
31	MD12号竈 前田野目字前田野目山1-11
32	MD13号竈 前田野目字前田野目山1-11
33	MD14号竈 前田野目字前田野目山1-11
34	MD15号竈 前田野目字前田野目山1-2
35	MD16号竈 前田野目字前田野目山1-10
36	MD17号竈 前田野目山園有林142林班そ24小班
37	MD18号竈 前田野目山園有林142林班そ24小班

第3図 五所川原須恵器窯遺跡位置図
 (本図は国土地理院平成7年修正「大釈迦」・「浪岡」を複製したものである。)

未発掘の窯跡で詳細は不明であるが、須恵器片、窯壁片が出土している。

MZ11号窯 持子沢D遺跡内に所在する窯跡で、奥溜池の北東にのびる丘陵上に位置し、標高は80mほどである。平成11年度の分布調査によって発見された。現況は原野で、狼野長根公園内となっている。未発掘のため詳細は不明であるが、窯壁片、須恵器破片が出土している。

MZ12号窯 持子沢D遺跡内に所在する窯跡で、奥溜池の北東にのびる丘陵上に位置し、標高は75mほどである。平成11年度の分布調査によって発見された。現況は原野で、狼野長根公園内となっている。未発掘のため詳細は不明であるが、窯壁片、須恵器破片が出土している。

前田野目窯跡支群

MD1号窯(砂田B遺跡1号窯) 砂田B遺跡内に所在し、前田野目川支流である鳥ノ子沢の北岸丘陵上に位置し、標高120mほどで、現況は山林である。1968年5月1～15日に立正大学の坂詰秀一氏により発掘調査が行われた。その結果、窯跡は道路工事によって既に焼部と焼き口部が破壊されていたが、現存長5.0m、焼成部幅1.7m、勾配は30度を測る無階、無段の竈窯であることが判明した。窯跡内から長頸壺(肩部にヘラ記号を付すものが多い)、広口壺、甕、坏が出土している。

MD2号窯(砂田B遺跡2号窯) 砂田B遺跡内に所在する窯跡で、前田野目川支流である鳥ノ子沢の北岸丘陵上に位置し、標高110mほどである。現況は山林である。林道工事で破壊されており、窯尻部のみ残存している。未発掘の窯跡で詳細は不明であるが、須恵器破片及び窯壁片が出土している。

MD3号窯 砂田C遺跡内に所在する窯跡で、前田野目川支流である沼ノ沢の北岸丘陵上に位置し、標高140mほどで、現況は山林である。1972年に立正大学の坂詰秀一氏により発掘調査が行われた。その結果、窯跡は道路工事によって既に焼部と焼き口部が破壊されていたが、現存長3.6m、焼成部幅1.7m、勾配は平均23度を測る無階、無段の竈窯であることが判明した。窯跡内から長頸壺、広口壺、鉢、坏、甕が出土している。

MD4号窯(砂田D遺跡1号窯) 砂田D遺跡内に所在する窯跡で、前田野目川支流である鳥ノ子沢の北岸丘陵上に位置し、標高は170mほどで、現況は山林である。1973年に村越潔氏と新谷武氏により発掘調査が行われた。その結果、窯尻部は林道工事の際に破壊されていたが、現存長7.5m、焼成部最大幅1.65m、勾配は平均23度を測る無階、無段の竈窯であることが判明した。甕、長頸壺、広口壺、坏が出土している。

MD5号窯(砂田D遺跡2号窯) 砂田D遺跡内に所在する窯跡で、前田野目川支流である鳥ノ子沢の北岸丘陵上に位置し、標高は170mほどで、現況は山林である。1973年に村越潔氏と新谷武氏によって灰原部分の発掘調査が行われた。その結果窯本体の詳細は不明であるが、甕、長頸壺、広口壺、坏など多量の遺物が出土した。

MD6号窯(鞠ノ沢窯跡) 鞠ノ沢遺跡内に所在する窯跡で、前田野目川右岸の丘陵上に位置し、標高は100mほどで、現況は宅地である。1968年立正大学の坂詰秀一氏により発掘調査が行われた。その結果全長9.2m、焼き口部幅2.4m、勾配は平均23度を測る無階無段の半地下式竈窯であることが判明した。長頸壺、広口壺、鉢、坏、甕が出土している。

MD7号窯(犬走窯跡) 犬走(3)遺跡内に所在する窯跡で、前田野目川右岸の丘陵上に位置し、標高

110mほどで、現況は畑地である。1997年6月14日～11月26日に畑地造成のため、浪岡町教育委員会の工藤清泰氏を中心として、各市町村の埋蔵文化財関係者の手によって発掘調査が実施された。その結果、窯体は1度作り替えられており、新しい窯は全長6.9m、焼成部の長さ4.4m、最大幅1.8m、燃焼部の長さ2.1m、最大幅2.6mを測る。勾配は燃焼部で平均10度、焼成部で平均23度を測る。

古い窯は燃焼部のみ残存しており、現存長3.9m、焚口部幅1.9mを測り、舟底状ビットが検出されている。また堆積層中より、B-TMが検出されており、従来考えていたよりも窯跡の操業期間が早まる可能性が高いと考えられる。出土遺物は、坏、鉢、広口壺、長頸壺、甕が出土している。

MD 8号窯 砂田B遺跡内に所在し、前田野目川支流の鳥ノ子沢にのびる小谷の西岸丘陵上に位置し、標高は150mほどで、現況は山林である。平成11年度の分布調査によって発見された。未発掘のため詳細は不明であるが、窯壁片、甕の破片が出土している。

MD 9号窯 野脇遺跡内に所在し、前田野目川支流増沢の北岸丘陵上に位置し、標高は130mほどで現況は山林である。平成11年度の分布調査によって発見された。未発掘のため、詳細は不明であるが窯壁片、甕の破片が出土している。

MD 10号窯 砂田F遺跡内に所在し、前田野目川支流鳥ノ子沢の北岸丘陵上に位置し、標高は90mほどで、現況は畑地である。平成10年度の分布調査によって発見された。現在窯体上に盛土がなされ、詳細は不明であるが、平成12年度の調査により、長頸壺、甕、坏が出土している。

MD 11号窯 砂田G遺跡内に所在し、前田野目川左岸丘陵上に位置し、標高は110mほどで、現況は山林である。平成12年度の分布調査によって発見された。未発掘のため詳細は不明であるが、窯壁片、甕の破片が出土している。

MD 12号窯 前田野目山(1)遺跡内に所在し、前田野目川支流堰の北岸丘陵上に位置し、標高は115mほどで、現況は山林である。平成11年度の分布調査により発見された。平成13年度に灰原部分の試掘調査を行った結果、上層よりB-TMが検出された。出土遺物は坏、皿、広口壺、長頸壺、甕が出土している。

MD 13号窯 前田野目山(2)遺跡内に所在し、前田野目川支流増沢の北岸丘陵上に位置し、標高140mほどで、現況は山林である。平成12年度の分布調査によって発見された。未発掘の窯跡であるが、窯体部分は盗掘されていた。窯壁片、少量の遺物が出土している。

MD 14号窯 前田野目山(3)遺跡内に所在し、前田野目川支流増沢の北岸丘陵上に位置し、標高200mほどで、現況は山林である。平成12年度の分布調査によって発見された。未発掘の窯跡で詳細は不明であるが、窯壁片、少量の遺物が出土している。

MD 15号窯 前田野目山(4)遺跡内に所在し、前田野目川支流増沢の北岸丘陵上に位置し、標高150mほどで、現況は山林である。平成11年度の分布調査によって発見された。未発掘の窯跡であるが、小沢により、一部削平されている。小沢より甕の破片が出土している。

MD 16号窯 前田野目山(5)遺跡内に所在し、前田野目川支流増沢の北岸丘陵上に位置し、標高は200mほどで、現況は山林である。平成11年度の分布調査によって発見された。沢より大量の遺物が出土し、平成12・13年の調査により、ミニチュア、坏、鉢、広口壺、長頸壺、甕が出土している。

MD 17号窯 砂田C遺跡内に所在し、前田野目川支流沼の北岸丘陵上に位置し、標高は140mほどである。平成12年度の分布調査によって発見された。未発掘の窯跡で詳細は不明であるが、窯壁片、少量の遺物が

出土している。

MD 18号窯 前田野目山（6）遺跡内に所在し、前田野目川支流沼の沢北岸丘陵上に位置し、標高は170mほどである。平成11年度の分布調査によって発見された。未発掘のため詳細は不明であるが長頸壺、広口壺が出土している。

原子窯跡支群

HK 1号窯 山道溜池遺跡内に所在し、山道溜池の南岸丘陵上に位置し、標高30mほどで、現況は溜池内に水没している。未発掘の窯跡で詳細は不明であるが、溜池の干満によりすでに窯体の一部が露出している。

HK 2号窯 山道溜池遺跡内に所在し、山道溜池の南岸丘陵上に位置し、標高30mほどで、現況は溜池内に水没している。平成12年度の分布調査によって発見された。未発掘の窯跡で詳細は不明であるが、窯壁片、少量の遺物が出土している。

HK 3号窯 山道溜池遺跡内に所在し、山道溜池の南岸丘陵上に位置し、標高30mほどで、現況は溜池内に水没している。平成10年度の分布調査によって発見された。未発掘の窯跡で詳細は不明であるが、窯壁片、少量の遺物が出土している。

HK 4号窯 原子下溜池（4）遺跡内に所在し、原子下溜池の北岸丘陵上に位置し、標高30mほどで、現況は溜池内に水没している。平成11年度の分布調査によって発見された。未発掘のため詳細は不明であるが、甕の体部破片が出土している。

HK 5号窯 紅葉遺跡内に所在し、原子下溜池の北岸丘陵上に位置し、標高30mほどで、現況は溜池内に水没している。平成11年度の分布調査によって発見された。未発掘のため詳細は不明であるが、甕の体部破片が出土している。

桜ヶ峰窯跡支群

SM 1号窯 桜ヶ峰（1）遺跡内に所在し、前田野目川の左岸、笹溜池の北東部丘陵上に位置し、標高は65～70mで、現況は畑地である。1973年9月9日に新谷武氏により発掘調査が実施された。その結果、焚口部が破壊されているが、現存長6.67m、燃焼部最大幅1.7m、勾配は平均23度を測る半地下式無階無段の窯であることが判明した。坏、長頸壺、広口壺、甕が出土している。

SM 2号窯 桜ヶ峰（1）遺跡内に所在し、前田野目川の左岸、笹溜池の北東部丘陵上に位置し、標高は65～70mで、現況は畑地である。平成11年度の分布調査によって発見された。重機により削平を受けており、広範に窯壁、遺物が散乱していた。甕、壺、坏が出土している。

第4章 調査の結果

第1節 MZ6号窯の検出状況

今回検出されたMZ6号窯は、窯尻部が重機により削平を受けて床面のみが残存している以外、保存状況は良好で、形状は燃焼部で幅が最も広くなり、窯尻部にかけて幅が狭くなる。これは以前に発掘調査が行われた持子沢B・C遺跡の各窯（坂詰 1972・1973・1974）と形状は一致し、一つの特徴といえる。

燃焼部の堆積状況及び焼成部の壁面の状況により、2回の作り替えが認められた。ここでは、古い窯をA窯、新しい窯をB窯と呼ぶことにし、各窯別に記述することにする。

A窯

燃焼部は赤褐色を呈し、炭化物及び灰を非常に多く含み、火熱により焼きしめられていたため、範囲を認定するのは容易であった。しかし焚き口部は、新しい窯に作り替える時に破壊されたのか確認できなかった。

主軸方位はN-123°-Wであり、規模は現存長7.14m、燃焼部の長さは2.05m、最大幅は2.20m、平均1.93m、勾配は推定される焚き口より平均8°と緩やかな勾配をしているが、焼成部との境付近で角度が急になり最大36°を測る。焼成部は、燃焼部に近い部分ではB窯の下にあることが、断ち割りの結果確認されている。それ以外は、ほぼ同一の床面を使用していると考えられる。現存長は5.09m、最大幅は1.66m、平均1.21m、勾配は平均23°を測る。

燃焼部は掘り方に黒色土を敷き、その上に粘土を貼って構築されており、犬走（3）遺跡でみられた堆積状況と酷似している。水はけをよくするために黒色土を敷くものと考えられる。

前述した燃焼部と焼成部の境界部分の最も角度が急な部分では、砂をあまり含まない粘土を貼り付けて補修していることから、少なくとも2回の焼成が確認された。

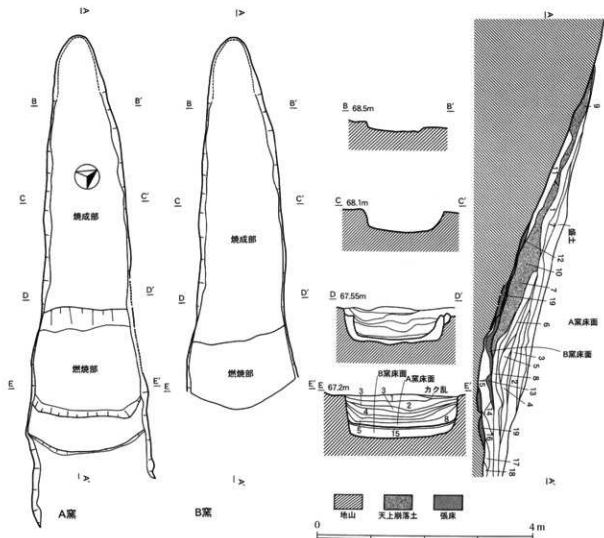
B窯

A窯の燃焼部に黒色土を敷き、その上に粘土を貼り付けることによって燃焼部と焼成部勾配の差を無くしている。なお黒色土中にブナ材を敷くことによって補強している（写真図版4-5）。燃焼部は使用頻度が少ないためかA窯ほどしまりはなく、軟質であった。また焚き口部も製品を取り出すために破壊されていたため、確認はできなかったが、燃焼部と灰原部の土色の変化によって焚き口部の推定は可能であった。

窯の規模は現存長6.93m、燃焼部の長さは1.27m、最大幅は2.12m、平均2.01m、勾配は最大26°、平均5°を測る。焼成部の長さは5.66m、最大幅は1.82m、平均1.25m、勾配は平均21°を測る。

焼成部は窯尻にむかって左壁面は新しく作り替えているが、右壁面は粘土を貼り付けて補修しているだけであった。床面は一部A窯と同様の床面を使用しており、床面及び壁面は砂を多く含むスサ入り粘土を貼り付けて構築されており、非常に脆弱な部分が多い。

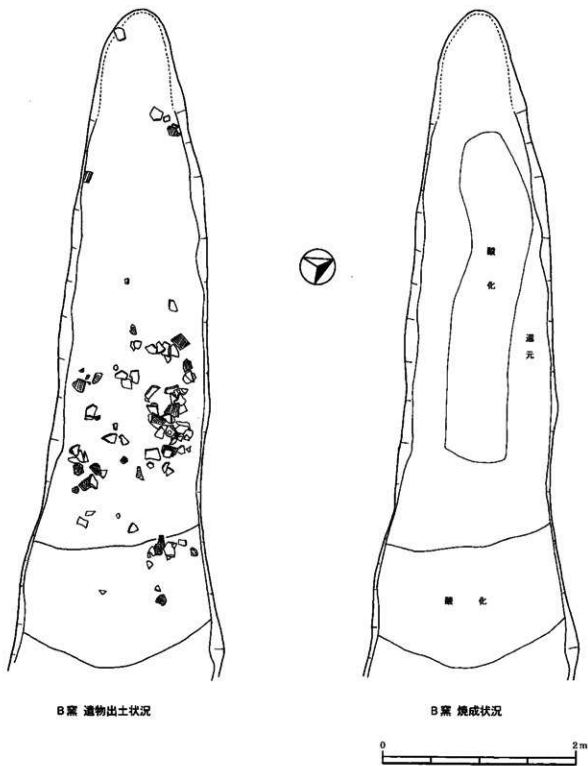
床面は平滑ではなく窪んでおり、その箇所には大甕等の大型製品を置くために、わざと窪めているものと考えられる。さらに床面からは大甕の体部破片が出土し、2次焼成を受けていること、内面に丸く緋帯が付着



土層観察表

層序	色調	土質	粘性	しまり	含有物
1層	10YR2/2 黒褐色	シルト	弱	弱	経3～5mmの炭化物を若干含む。経10mm以上のLBを少量含む。
2層	10YR1.7/1 黒色	シルト	中	中	経7～8mmのローム粒を少量含む。
3層	10YR4/4 褐色	シルト質粘土	中	弱	経7～8mmのローム粒を少量含む。経1～2mmの炭化物を若干含む。経1～20mmの焼土粒を少量含む。
4層	10YR3/4 暗褐色	シルト	弱	中	経5～7mmの焼土粒を少量含む。経1～5mm程度の炭化物を微量含む。
5層	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト	中	中	経1～5mmの焼土粒を少量含む。経5～10mmの添加物を少量含む。炭層を中程度含む。
6層	10YR4/4 褐色	シルト	弱	中	経7～10mmの焼土粒を多量に含む。
7層	10YR4/4 褐色	シルト	中	中	経5～7mmの焼土粒を少量含む。経1～3mm程度の炭化物を微量含む。
8層	10YR2/2 黒褐色	シルト	やや強	やや強	経3～5mmの焼土粒を少量含む。経5～7mm程度の炭化物を多量に含む。
9層	10YR4/4 褐色	シルト	やや強	やや強	経3～10mmの焼土粒を多量に含む。経3～10mm程度の炭化物を少量含む。炭層を多量に含む。
10層	7.5YR5/8 明褐色	砂質シルト	弱	弱	焼土粒を主成分とする層。その他に炭層を多量に含む。
11層	5Y5/1 灰色	砂	弱	弱	炭層を多量に含む。
12層	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	強	やや強	経1mm程度の炭化物を若干含む。
13層	10YR3/3 暗褐色	シルト	弱	弱	経5～10mm程度の炭化物を多量。経1～2mmのローム粒を微量。経5～10mmのローム粒を微量。アッシュを微量含む。
14層	10YR3/1 黒褐色	シルト	弱	弱	経5～15mm程度の炭化物を多量。経3～10mm程度の焼土粒を多量。経1～10mmのローム粒を少量。経10mm程度の焼土プロットを若干。アッシュを少量含む。
15層	10YR1.7/1 黒色	シルト	中	強	経10～20mm程度の炭化物を多量。経20～30mm程度の焼土プロットを多量。経1～2mm程度の焼土粒を若干。経50mm程度の焼土プロットを若干。アッシュを少量含む。
16層	10YR2/2 黒褐色	シルト	中	中	経3～10mm程度の炭化物を多量。経1～3mmの焼土粒を少量含む。経1～15mmのローム粒を微量。経10～20mmの焼土プロットを若干。アッシュを少量含む。
17層	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	弱	弱	経5～30mm程度の炭化物を微量含む。1～3mmの焼土粒を少量含む。経3～10mmのローム粒を微量含む。アッシュを少量含む。
18層	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	弱	中	経3～10mm程度の炭化物を微量含む。2～10mmの焼土粒を少量含む。経2～5mmのローム粒を微量含む。アッシュを少量含む。炭層を少量含む。
19層	7.5YR5/8 明褐色	粘土	弱	弱	経1～3mmの焼土粒を若干含む。経1～5mmのローム粒を若干含む。炭層を若干含む。

第4図 MZ 6号窯検出状況



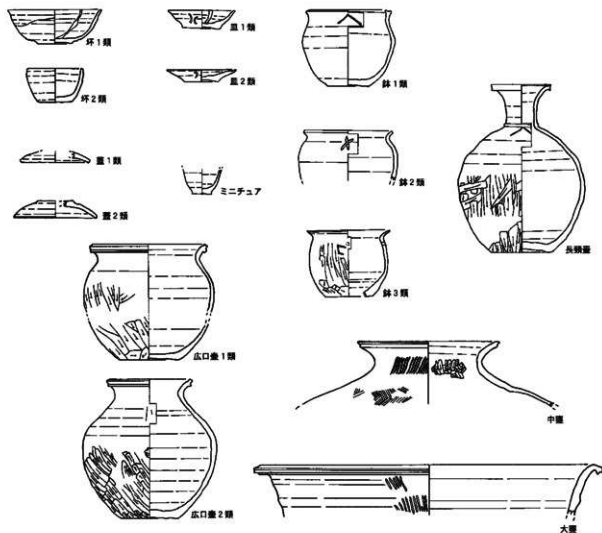
第5図 B窯遺物出土状況、焼成状況

していることから、大甕の体部破片を焼台として利用していたと考えられる。床面直上から出土する遺物の下には砂が堆積しており、あらかじめ製品の設置を容易にするために砂を敷いていた可能性も考えられる。

焼成の状況は、両壁面付近及び燃焼部に近い中央部分が還元炎焼成であり、その他が酸化炎焼成であった(第5図)。

天井崩落土の中には直径3～5cm程の心材が焼けて、中空になったもの(写真図版5-4)が見られることから、天井を架ける際に枝木を使用していたと考えられるが、その天井高架材を据えた際の柱穴は確認できなかった。窯壁片の中には大甕の体部破片が貼り付いた状態のものが多数検出されているが(写真図版5-5)、これは窯壁を補修する際に補強材として使用されたものと考えられる。

層位では、窯の上層が重機により削平を受けていたが、燃焼部付近には自然堆積層である黑色土が確認されたが、犬走窯跡で確認されたB-Tmは確認されなかった。



第6図 MZ 6号窯の器種組成

天井崩落土と床面の間に自然堆積層が認められないこと、床面に製品が残存していないことから、当窯は製品を搬出してから、廃絶した後、あまり期間が過ぎないうちに天井部が崩落したものと考えられる。

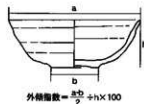
第2節 出土遺物

本窯跡で出土した遺物には、皿、坏、蓋、鉢、壺、甕といった器種があげられる（第6図）。しかし、窯体内に遺物があまりなかったこと、灰原部分が重機によって削平を受けていたために、出土遺物の一部のみを示すことにとどまるが、口縁部が約6分の1以上残存しているものに関してはすべて図示することにした。坏：底面から体部にかけて緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁付近において直上するものと外彎するものがあり、器高に対する口径の比が0.3以上の個体である。整形技法は内外面ともロクロナデ整形であり、底面の切り離しは回転糸切が殆どであり、静止糸切（12）、ナデ調整（20）も若干みられる。ヘラ記号はすべて体部に付けられており、類似の形態をしているものが多くみられる。

口径の大小により細分が可能で、口径10cm以上のものを坏1類、10cm未満のものを坏2類と呼ぶことにする。また、犬走窯で出土した口径15cm以上の個体は検出されなかった。

坏1類（第8図1～18）

法量は口径11.3～14.2cm、平均12.7cmを測る。器高は4.2～6.1cm、平均5.0cmを測る。底径は4.4～5.8cm、平均5.3cmを測る。外傾指数（第7図、笹沢 浩 1976を参考）は53～93とばらつきがあるものの80～90の範囲に収束する傾向がある。



第7図 坏の外傾指数の算出方法

坏2類（第8図19・20）

口縁の端面形は19のように坏1類と同様のものと、20のように上面を面取りするものがみられる。法量は口径7～8.2cm、器高は4.9cm、底径は5cmを測る。

皿：底面から体部にかけて、外彎しながら立ち上がり、体部ではまっすぐに外傾し、口縁部下半で外側につまみ出されているため、緩やかに外彎する器形である。器厚は底面付近と口縁部付近での差が殆どないのが特徴である。器高に対する口径の比が0.3未満の個体である。整形技法は内外面ともロクロナデ整形であり、底面は回転糸切痕を残すものとケズリ調整を行っているものがある。ヘラ記号はすべて体部に付けられており、確認されたものはすべて類似の形態をしている。器高に対する口径の比が0.2以上と未満のものに細分が可能であり、前者を皿1類、後者を皿2類と呼ぶ。

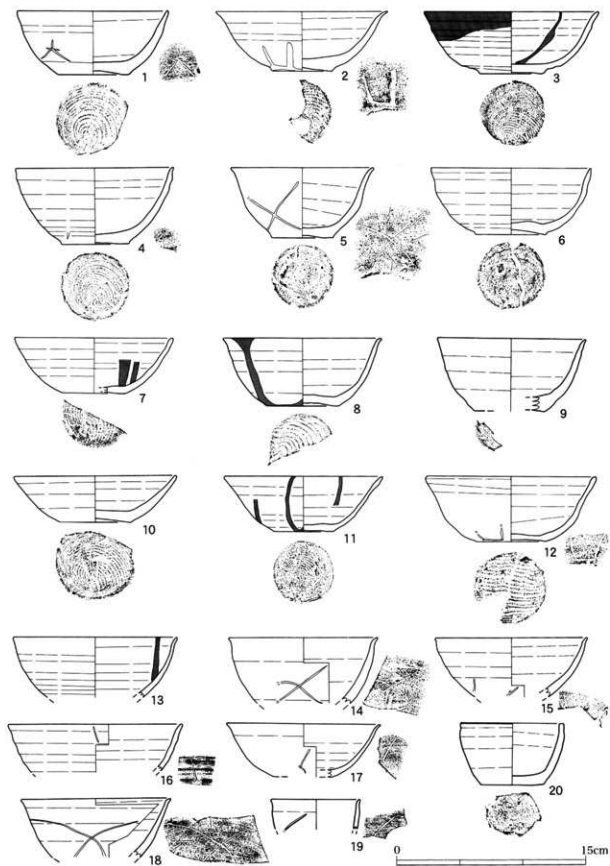
皿1類（第9図21）

1個体のみ出土であり、詳細は不明であるが、法量は口径10cm、器高は2.7cm、底径は5.5cmを測る。

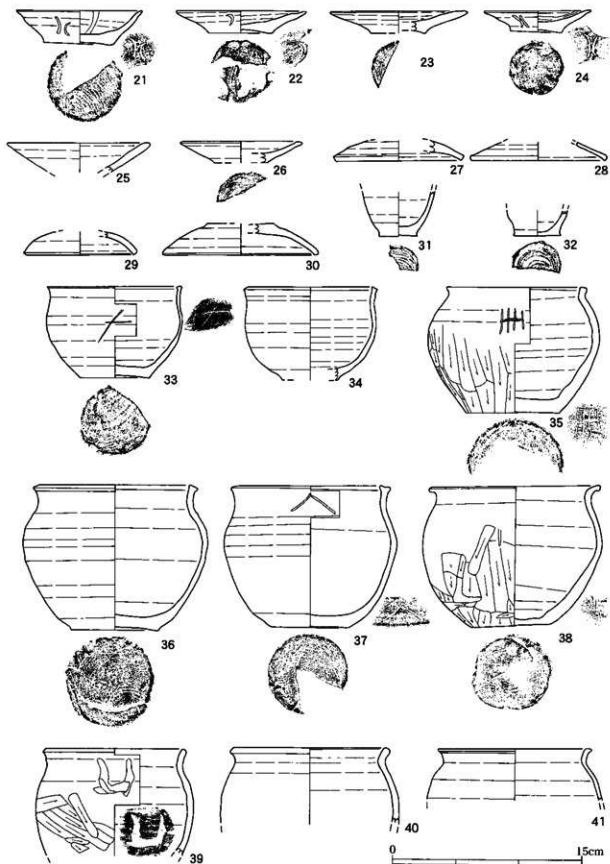
皿2類（第9図22～26）

法量は口径8.2～11.4cm、平均11.9cmを測る。器高は1.7～2.2cm、平均1.9cmを測る。底径は4.2～5.0cm、平均4.5cmを測る。

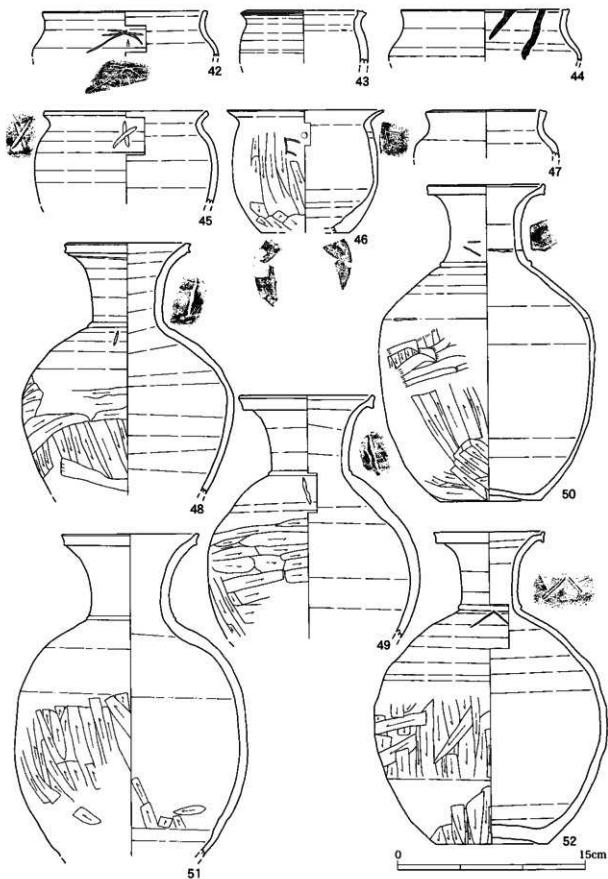
蓋：器高に対する口径の比は皿と同様0.3未満であるが、皿と異なり口縁部が内彎する器形の違いで皿と区別した。頂部から口縁部にかけて緩やかに内彎する器形である。調整は内外面ともロクロナデであり、頂部の調整は残存しているものは回転糸切痕を残している。つまみ部は検出されなかった。口縁部端面は面取り



第8图 MZ 6号窑出土须惠器(1) 1~18: 坏1類 19~20: 坏2類



第9図 MZ 6号窯出土須恵器(2) 21:皿1類 22~26:皿2類 27~30:蓋 31・32:ミニチュア
33・34・36・37・39:鉢1類 35・38・40・41:鉢2類



第10図 MZ 6号窯出土須恵器(3) 42・47・47:鉢1類 43・45:鉢2類 46:鉢3類 48~52:長頸壺

を施すものと、内面に折り返し端部が丸みを帯びているものがある。前者を蓋1類とし、後者を蓋2類と呼ぶ。出土数が少なく、現在まで消費地遺跡での出土が見られないことから、主要生産品ではなかったと考えられるが、五所川原須恵器窯跡においても蓋の生産が行われたことを示す貴重な資料であるといえる。ヘラ記号は確認されなかった。

蓋1類 (第9図27～29)

いずれも破片資料であり、全体を復元できるものではなく、頂部は不明である。口径9～10.4cmであり、長頸壺に使用されたものと考えられる。

蓋2類 (第9図30)

1点のみの出土であるが頂部まで残存していたため、全体の復元が可能な個体である。頂部は回転糸切無調整であり、つまみは有さない。法量は口径12.0cm、頂部径5.5cm、器高2.5cmを測る。なおこの蓋2類は近隣のMZ4号窯においても表採されており、MZ支群における蓋生産が少数ながらも一般的に行われていたと考えられる。

ミニチュア (第9図31・32) : いずれも底部から体部下半までの資料であり、全体の器形は不明であるが、壺のミニチュアであると考えられる。兩個体ともにロクロ整形であり、底面は回転糸切痕を残している。法量は底径3～3.6cmである。

鉢 : 口径と体部最大径の差が少なく、体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、体部上半に最大径を有する。明確な頸部を有さず、口縁はやや緩やかに外彎しながら立ち上がり、端部上面を面取りするもの(鉢1類)、明確な頸部を有し、口縁はやや緩やかに外彎しながら立ち上がりくの字状に大きく外反し、端部は外側あるいは上面に面取りを行うもの(鉢2類)、くの字状に大きく外反し、端部は外側につまみ出しただけのもの(鉢3類)がある。調整はロクロナデのみのものとケズリを施すものがみられ、底面の切り離しは、回転糸切のものとケズリ調整のものがみられる。

全体の復元が可能なものには、ほぼすべての個体にヘラ記号が付されている。いずれの場合も体部上半に付されており、その他の場所では確認されなかった。

鉢1類 (第9図33・34, 36, 37, 39, 第10図42, 44, 47)

法量は口径9.6～13.4cm、平均11.6cm、器高7.2～11.2cm、平均8.95cm、底径4.4～7.3cm、平均5.9cmを測る。調整はロクロナデのみのものと体部下半にケズリを施すものがみられ、底面の切り離しは、回転糸切のものとケズリ調整のものがみられる。

鉢2類 (第9図35, 38, 40・41, 第10図43, 45)

法量は10.0～13.6cm、平均12.5cm、器高11.0～11.5cm、平均11.3cm、底径6.2～7.0cm、平均6.6cmを測る。調整はロクロナデのみのものと体部下半にケズリを施すものがみられ、底面の切り離しは、回転糸切のものとケズリ調整のものがみられる。

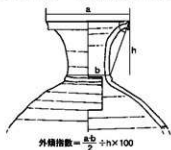
鉢3類 (第10図46)

1個体のみの出土であるため、詳細は不明であるが、五所川原産須恵器の場合口縁端部に面取りが施されるものが一般的であるのに対し、この個体はただつまみ出しただけの口縁形である。法量は口径12.6cm、器高9.0cm、底径7.8cmを測る。

長頸壺 (第10図48～52, 第13図53～68) : 細長い頸部はやや開き気味に立ち上がり、端部は上下方向に

つまみ出され、外側及び上方向は面取りされている。体部は中央付近に最大径を持つ球状のものと、肩部が緩やかに内彎しながら張り出し胴部上半に最大径をもつ2つのタイプがある。体部下半にケズリ調整が施され、底部はケズリ調整のものとナデ調整のものがみられ、前者には細いヘラ状の工具で、底部周縁から中央に向かって、工具の痕跡を明確に残してケズリ調整を行った後、高台を付けるいわゆる菊花状文（第13図68）と呼ばれている底部も見られる。また底面に砂が附着している底もみられる。ヘラ記号は全体が復元できたものにはすべて付けられており、付けられる場所は、頸部か肩部に限られ、それ以外では認められなかった。

全体が復元できたもの（第10図50、52）は少なく、口縁部破片のみの復元個体が多いので、口径、頸部高、口頸部の外傾指数を指標とした。口径は5.0~13.4cm、平均9.3cm、頸部高は3.4~7.1cm、平均5.7cm、口頸部の外傾指数（第11図）は20~46とばらつきはあるもののほぼ30~40の範囲に収束する傾向がある。



第11図 長頸壺の外傾指数の算出方法

広口壺：体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、体部上半に最大径を有する。頸部は短く、口縁は緩やかに外反するものと、くの字状に強く外反するものがある。口縁の端部は上面と外面に面取りが施される。調整は体部下半にケズリ調整が施され、底部はケズリもしくはナデ調整が施される。口径から最大径までの外傾指数（第12図）が20未満のものとそれ以上のものに分類され、前者を広口壺1類、後者を広口壺2類とする。

広口壺1類（第14図72、74~76）

完全に復元されたものは少ないが、器形は鉢2類と同様の器形であり、口径15cm以上のものを広口壺1類と分類した。法量は口径16.6~19.3cm、平均18.2cm、最大径は19.4~22.5cm、平均20.4cmを測る。

広口壺2類（第14図77、第15図81）

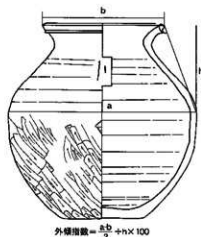
完全に復元されたものは少ないが、器形は中甕と同様の器形であり、叩き目の有無によって分類した。法量は口径12.8~14.8cm、平均13.8cm、最大径は19.6~20.0cm、平均19.8cmを測る。

中甕（第15図82~90）

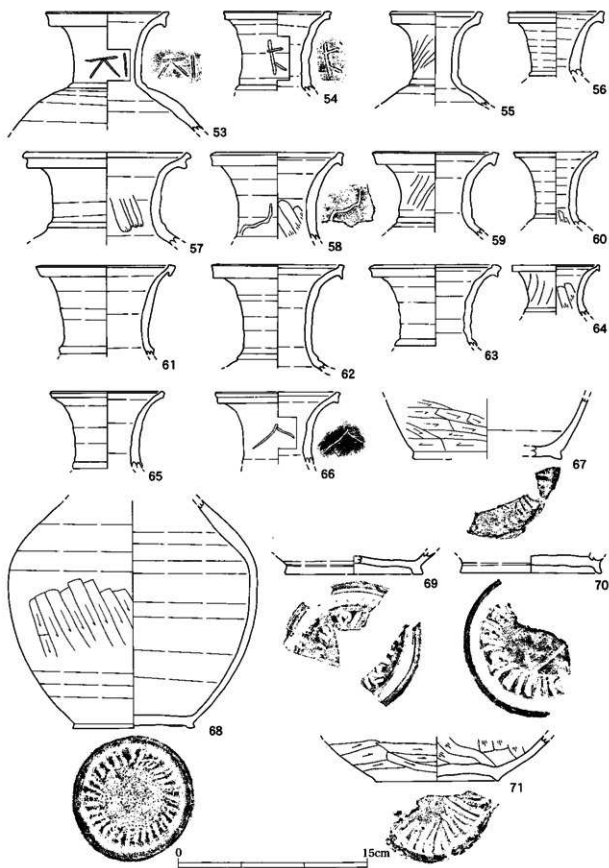
完全に復元できたものはなく、体部上半あるいは底部のみの個体である。基本的に広口壺2類と同様の器形であり、叩き目の有無によって区別した。底部に関しては丸底が一般的であるが、一部平底の甕もある（第15図89・90）。調整は口頸部では叩き調整の後ロクロナデにより叩き目を消しており、肩部及び底部は格子叩き目、体部は平行叩き目が施されるものが一般的である。口径は20cm前後のものが多く、ヘラ記号は頸部に付けられる。

大甕（第15図91）

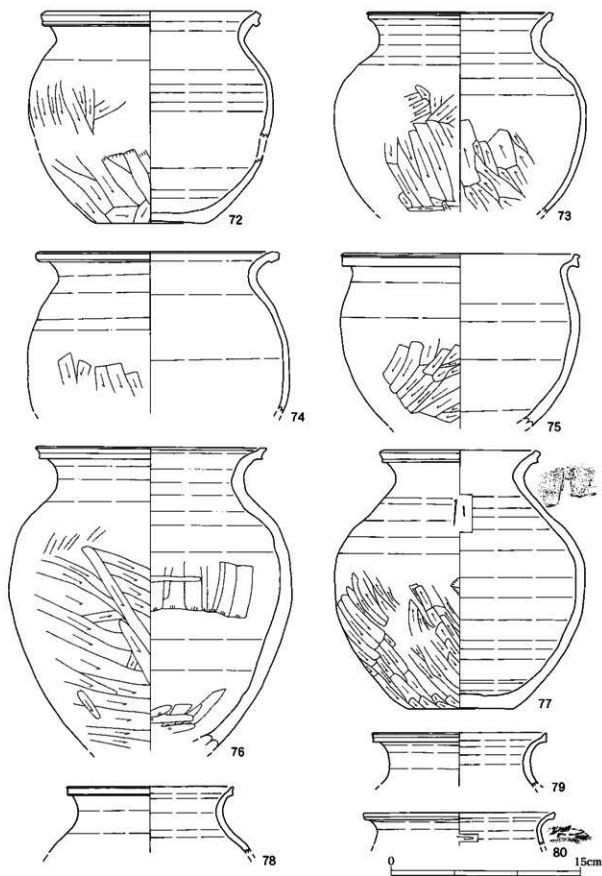
口縁部のみの復元であり、器形等の詳細は不明であるが、口縁部は緩やかに外傾しながら立ち上がり、端部付近で大きく屈曲し外側に張り出している。端部は下方向につまみ出し、端部外面は一部を残し何回かに分けて面取りされており、1条の隆帯が施されている。叩き調整の後、ロクロナデにより叩き目を消すのは中甕と同様である。



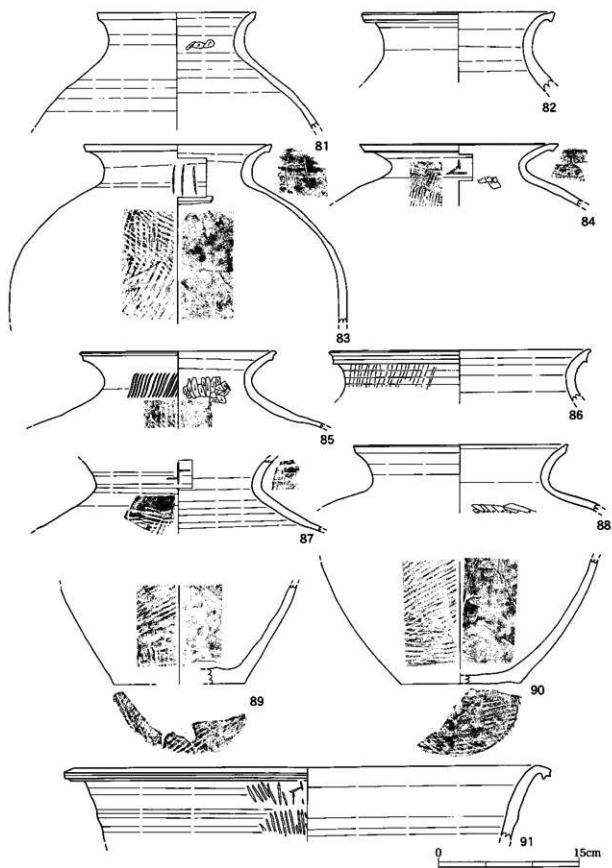
第12図 広口壺の外傾指数の算出方法



第13图 MZ6号窖出土须惠器(4) 53~68:长颈壺 69~71:壺底部



第14图 MZ 6号窯出土須惠器(5) 72·74~76: 広口壺1類 73·77: 広口壺2類



第15図 M Z 6号窯出土須恵器 (6) 81: 広口壺2類 82~90: 中壺 91: 大壺

第5章 自然科学分析

MZ6号窯出土炭化材の年代及び樹種同定

パリオサーヴェイ株式会社

はじめに

隠川(1)遺跡は、青森県五所川原市持子沢字隠川に所在し、大釈迦丘陵西南端の高位段丘上、標高約62~68mに立地している。当遺跡は持子沢窯跡支群に含まれており、周辺にはMZ1・4・7号窯跡などがあり、いずれの窯跡も舌状台地突端部の斜面に立地している。

今回の分析調査は、持子沢窯跡群と称される窯跡のうち、隠川(1)遺跡(隠川695-4)内に所在するMZ6号窯跡を対象に、窯跡燃焼部より出土した炭化材を資料として、窯跡の年代観や燃料材に関する情報を得るため放射性年代測定および樹種同定を実施する。

1. 試料

試料は、窯跡燃焼部15層より出土した炭化材3点と、同層から出土した樹皮の付着した炭化材1点の計4点である(いずれもH3グリッド)。これら試料から、樹皮の付着した炭化材を対象に放射性炭素年代測定を、全点を対象に樹種同定実施する。なお、放射性炭素年代測定を実施するにあたり、使用年代との誤差や外部からの汚染を考慮し炭化材の樹皮直下から試料を採取した。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は、株式会社 加速器分析研究所の協力を得た。

(2) 樹種同定

木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、樹種を同定する。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

測定年代値(補正年代値)は、約1100年前を示す。なお、 $\delta^{13}C$ の値は、加速器を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}C/^{12}C$)を測定し、標準試料PDB(白亜紀のペレムナイト類の化石)の測定値を基準として、それからのずれを計算し、千分偏差(‰;パーミル)で表したものである。今回の試料の補正年代は、この値に基づいて補正をした年代である。

表1 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

遺構名	層位	試料の質	樹種	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP	Code.No.
H3カマ	15層	炭化材	ブナ属	—	—	—	—
	15層	炭化材	ブナ属	—	—	—	—
	15層	炭化材	ブナ属	—	—	—	—
	15層	炭化材(樹皮付着)	ブナ属	1110±30	-23.9±0.7	1090±30	IAAA-10088

(1)測定年代および補正年代は、1950年を基点に何年前であるかを示した値。

(2)誤差は、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代。

(2) 樹種同定

樹種同定結果を表1に示す。炭化材は、全て落葉広葉樹のブナ属に同定された。主な解剖学的特徴を以下に示す。

・ブナ属 (*Fagus*) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は同姓～異性Ⅲ型、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

なお、H3カマ燃焼部の炭化材には、樹皮が付いているものがあり、その試料に関しては年輪数の計測と最終形成年輪の観察も同時に行った。その結果、年輪は32本認められた。また、最終形成年輪は、早材部が形成終了しており、晩材部が形成終了または形成途中と考えられる。

4. 考察

(1) 年代について

窯跡燃焼部の15層から出土した炭化材の年代値は、約1100年前の9世紀前半に相当する値を示す。放射性炭素年代は、測定法自体が持つ誤差や、大気中の ^{14}C の濃度が過去において一定であるという測定の前提条件が成立しないことなどから、年輪などから測定されたいわゆる暦年代とは一致しない。これらのことから、年輪年代による暦年代既知の年輪についての放射性炭素年代測定を実施することで、暦年代と放射性炭素年代を両軸とする補正曲線が作られている (Stuiver, M. et al, 1998)。この補正曲線によれば、今回測定された年代の頃では、暦年代が放射性炭素年代測定に比べて50年程度新しい。すなわち、放射性炭素年代測定で9世紀前半と測定された試料の暦年代は、それより50年程新しい10世紀初頭の年代になる可能性がある。

なお炭化材の年代値は、試料となった植物が死滅した年代値であり、遺構の年代観と必ずしも一致するとは限らない。また、過去に形成された炭化材が、覆土堆積時に混入する可能性も考えられる。したがって、今後は、炭化材の詳細な出土状況など考古学的所見と合わせ評価・検討するとともに、他の炭化材についても放射性炭素年代測定を実施し検証を行うことがのぞまれる。

(2) 炭化材について

窯跡燃焼部から出土した炭化材は、全て落葉広葉樹のブナ属であった。この結果から、窯の燃料材として、ブナ属が利用されていたと考えられる。ブナ属は冷温帯落葉広葉樹林の極相を構成する種類であり、青森県内では海拔10～1100mまで分布する (平井, 1979; 斉藤, 1987)。本遺跡でも、南部の岩木山麓や東部の津軽山地にブナ林が分布している。これらの現植生を考慮すれば、古代においてもブナ属の木材の入手は容易であったことが推定される。

なお、当窯跡は須恵器窯跡とされており、本遺構からは、甕・壺などの貯蔵具、鉢・坏・皿などの食膳具とされる器種が出土している。須恵器は、一般に還元炎を用いて摄氏1100℃以上で焼成される (玉口・小金井, 1984) ことから、使用する燃料材は、重硬で火持ちの良い種類が適材といえる。ブナ属の木材は広葉樹林としては比較的重硬な部類に入り、器具材や薪炭材として利用される (平井, 1979) ことから、燃焼部から出土した炭化材がいずれもブナ属であったことは、燃料材として選択された可能性が想定される。なお、現植生を考慮すると、ブナ林が周辺に存在し、このような環境が窯跡群の立地に関係していた可能性

も考えられる。

今後は、当窯跡を含む周辺の窯跡から出土した炭化材の樹種同定、花粉分析、植物珪酸体分析などを実施し、窯の燃料材の変遷や当時の須恵器窯操業による当地域の植生変化に関する情報を得たいと考えている。

引用文献

平井 信二 1979 『木の事典』第2巻 かなえ書房

武藤 信夫 1987 「青森県の植生」『日本植生誌 東北』pp.443-451 至文堂

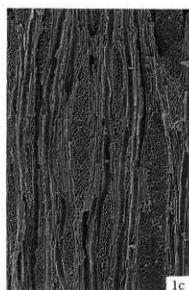
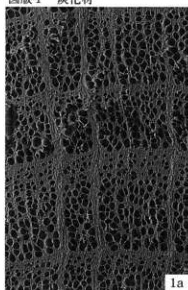
Stuiver, M. Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B.,

McCormac, F. G., v. d. Print, J., and Spurk, M. (1988) :INTCAL98 radiocarbon age

Calibration. 24,000-0calBP. Radiocarbon, 40, pp.1041-1083

玉口 時雄・小金井 靖 1984 土師器・須恵器の知識 p.163 東京美術

図版1 炭化材



1. プナ属 (H0灰原 埋土15層)
a : 木口, b : 木口, c : 木口

200 μ ma
200 μ mb, c

第6章 まとめ

今回の発掘調査では主として五所川原須恵器窯跡群の中でも操業開始時期に近いと考えられる持子沢窯跡支群の窯跡の構造、操業期間、遺物の器種組成について知る手がかりが得られればという目的で行われた。その結果窯跡の構造は以下に示す通りである。

1. 窯は半地下式の無階・無段の竈窯（登窯）であり、窯尻にかけて先が窄まる形状である。これは以前発掘調査が行われた持子沢B・C窯跡の形状も同様であり、持子沢窯跡支群の特徴であると考えられる。
2. 窯の操業は燃烧部の床面の張り替えが1回、焼成部の壁面の補修が1回見られ、最低でも2回以上の操業が行われたことが確認された。また床面を構築する際に黒色土を敷いてその上に粘土を貼って床面としているのがこの窯の特徴であり、犬走（3）遺跡でも同様の堆積状況が確認されているため、当窯跡群における一つの特徴であると考えられる。
3. 窯内に遺物を置く際に、大甕などの大型の製品が安定するように焼成部床面に凹凸をつけていた。また焼台として大甕の体部破片を利用していたことが判明した。
4. 燃烧部に残存していた炭化材の樹種同定と年代測定を行ったところ、樹種はブナ属であり、年代は10世紀の初頭という結果であった。

出土遺物に関しては、灰原部分が重機によって削平を受けていたために量的な把握をすることは困難であるが、以下のことが判明した。

1. 出土器種は皿、坏、蓋、鉢、長頸壺、広口壺、中甕、大甕、ミニチュアであり、五所川原須恵器窯跡群の中では器種のバリエーションが豊富である。
2. 口縁部端面形は鉢では上面を面取りするものがみられ、長頸壺、広口壺では犬走（3）遺跡で分類しているa1・a2・b1類のみであり、新しいとされている砂田D2号窯の端面形は一点も見られない（断面の端面形は五所川原市教育委員会編 1998「犬走須恵器窯跡報告書」p.119参照）。中甕では基本的にa1類であるが、1点だけb2類がみられた。大甕では口縁部の出土数が少ないため詳細は不明であるが、基本的にc1類のみである。
3. 従来甕は丸底であると考えられていたが、当窯跡から平底の甕が出土した。まだ消費地からの出土はないが、初期のころは平底の甕も作られたものと考えられる。
4. 壺の底部に菊花状にケズリ調整を施した後、高台状に粘土紐を貼付けている底部が検出されたが、高台の造りがしっかりしているものも見られるため、初期には高台をつけるという意識があったものと考えられる。
5. ヘラ記号を見ると器種ごとにある程度のまとまりがみられたため、当窯跡でのヘラ記号は器種を区別するためにつけられた可能性が高いと考えられる。

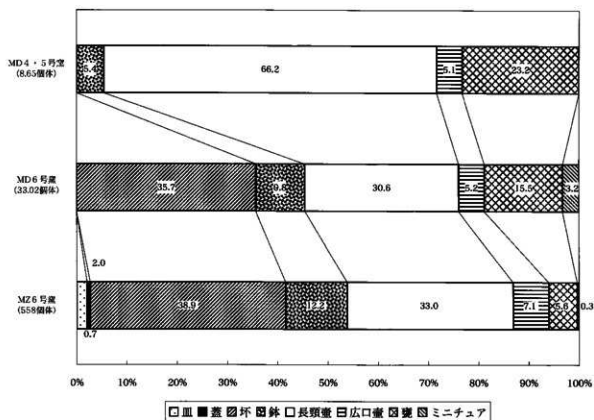
以上今回の発掘調査によって判明したことを簡条書きにして書いてみたが、今回出土した器種ごとの個体数による器種組成表を第3表に、それに基づくグラフを第16図に示し、参考として犬走須恵器窯跡、砂田D1・D2窯跡の出土数も載せた。

これによるとMZ6号窯では食膳具である坏・鉢等が50%を超えるのに対し、MD6号窯ではやや減少し

第3表 MZ6号窯・MD6号窯MD4・5号窯出土須恵器の器種組織表

器種	MZ6号窯		MD6号窯 (犬走窯)		MD4・5号窯 (砂田D1・D2窯)	
	個体数	%	個体数	%	個体数	%
皿	12	2.0	0	0	0	0
蓋	4	0.7	0	0	0	0
坏	229	38.9	11.78	35.7	0	0
鉢	72	12.2	3.22	9.8	0.47	5.4
長柄壺	194	33.0	10.11	30.6	5.73	66.2
広口壺	42	7.1	1.71	5.2	0.44	5.1
甕	33	5.6	5.13	15.5	2.01	23.2
ミニチュア	2	0.3	1.07	3.2	0	0
計	588個体		33.02個体		8.65個体	

MD6号、MD4・5号窯の数は五所川原教育委員会1998「犬走須恵陶器発掘調査報告書」による



第16図 MZ6号窯、MD6号、MD4・5号窯出土須恵器の器種組成比

(MD6号、MD4・5号窯の数は五所川原教育委員会1998「犬走須恵陶器発掘調査報告書」により抜粋)

45.5%となり、MD4・5号窯では急激に減少し、僅か5.4%を占めるにすぎない。逆に貯蔵具である長頸壺・広口壺・甕の比率が、MZ6号窯では45.7%と過半数を割るのに対して、MD6号窯ではやや増加し、51.3%となり、MD4・5号窯では急激に増加し、94.6%を占める。これは従来から言われていたことであるが、五所川原産須恵器の生産体系が操業開始時期は貯蔵具も半数を占める程の生産を行っていたが、時期が新しくなるにつれて、しだいに貯蔵具中心の生産体系へと変化していくことを明確に示す結果となった。また、器種組成の面から見ると、MZ6号窯とMD6号窯の時期差はあまり無く、MZ6号窯とMZ4・5号窯の間に時期差が生ずるものと考えられる。

次に各窯の器種組成に基づいて、編年の試案を第3表に掲げた。なお、砂田D窯の遺物が少量であるために、同様の器種組成を持つと考えられるMD16号窯の資料も掲載した。まだ窯の資料が少ないために詳述は避けるが、皿・蓋は早い段階で消滅するものと考えられ、坏には変化が認められず、鉢・壺に関しては調整技法の変化はなく、器形では口縁部の広口化の傾向が新しくなる程強くなる。甕に関しては外側へのつまみ出しが逆に弱くなる傾向が窺える。今後さらに資料数を増加することにより、五所川原における須恵器生産のあり方を明らかにしていくことが今後の課題である。

現在4つの支群に分類しているが、最も標高の低い場所に位置する原子窯跡支群の調査がまだ行われていないため、今後調査をしていく上で原子窯跡支群と持子沢窯跡支群の時期的な関係というものを明らかにしていきたいと考えている。また同一支群内における各窯において、器種による生産に違いが生じるのか現在のところ不明であり、今後の課題である。

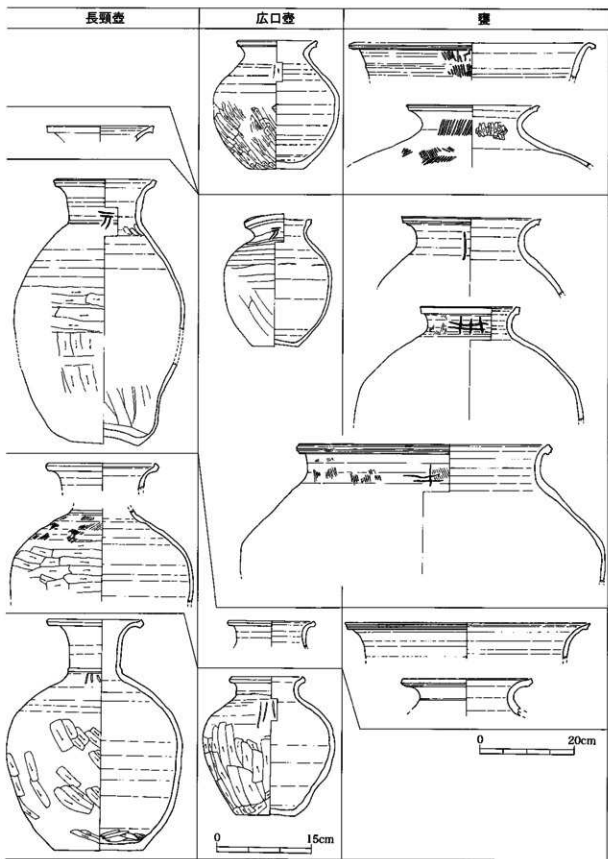
参考文献（表2以外で使用したもの）

- 中村 浩 1980『須恵器 -考古学ライブラリー5』ニューサイエンス社
 水野・堀田 1983 土地基本調査「青森西部」
 岩見誠夫・船木義勝 1985「秋田県の須恵器および須恵器窯の編年」『秋大史学』第32号
 笹沢 浩 1986「奈良・平安時代土器の器種分類」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書-諏訪市
 その4-1』
 山本哲也 1988「據文文化に於ける須恵器について」『國學院大學考古学資料館紀要』第4輯
 秋田県教育委員会 1989『一般国道7号線八竜能代道路建設事業に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書-福田遺跡・
 石丁遺跡・蟹子沢遺跡・十二林遺跡-』秋田県文化財調査報告書第178集
 日本の地質「東北地方」編集委員会編 1989『日本の地質2 東北地方』
 福島県会津若松市教育委員会 1993『会津 大戸窯 -大戸古窯跡群発掘調査報告書』会津若松市文化財調査報告
 書第32号
 青森県教育委員会 1993『青森県の遺跡地図』
 三浦 圭介 1995「第3章 古代」『新編弘前市史 資料編1考古編』
 八王子南部地区遺跡調査会編 1997『南多摩古窯跡群 I』
 三浦圭介・神 康夫 1997「五所川原古窯跡群で生産された須恵器について」『日本考古学協会1997年度秋田大会
 要旨・律令国家・日本海-シンポジウムII-資料集-』
 窯跡研究会編 1999『須恵器窯跡構造資料集 1』
 利部 修 2000「平安時代の砂底土器と東北北部長頸瓶」『考古学ジャーナル』第462号
 青森県史編さん自然部会編 2001『青森県史 自然編 地学』
 松本達速 2001「五所川原産須恵器の胎土分析」『物質文化』第71号

	坏	小坏・ミニチュア	皿・蓋	鉢	長頸壺
MZ6号窯					
MD6号窯(旧)					
MD6号窯(新)					
MD4・5号窯					
MD16号窯					

第4表 五所川原山須恵器の編年試案

(MD6・4・5号窯の資料は五所川原市教育委員会1998『犬走須恵器窯跡発掘調査報告書』より抜粋)



第5表 遺物観察表(1)

遺物 番号	器種	グリッド	層位	法量				残存部	残存率	外面調整			
				口径	器高	底径	最大径			口頸部	体部上半	体部下半	底(天井)部
1	坏1類	E0	灰原埋土	12.00	5.15	5.60	12.00	RSBF	46	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回糸
2	坏1類	H1	灰原埋土	13.60	4.80	5.60	13.60	RSBF	40	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回糸
3	坏1類	E0,H0	灰原埋土	13.80	5.00	4.90	13.80	RSBF	63	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回糸
4	坏1類		表土	12.60	6.10	5.40	12.60	RSBF	59	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回糸
5	坏1類		表土	11.30	5.50	4.90	11.30	RSBF	66	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回糸 ナデ
6	坏1類		表土	12.60	5.30	5.30	12.60	RSBF	55	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回糸
7	坏1類		灰原埋土	12.60	4.40	5.00	12.60	RSBF	31	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回糸
8	坏1類	G0,H0	灰原埋土	12.60	5.40	5.80	12.60	RSBF	55	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回糸
9	坏1類	F0	灰原埋土1層	11.80	5.80	5.60	11.80	RSBF	16	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回糸
10	坏1類		表土	13.00	4.20	5.80	13.00	RSBF	49	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回糸
11	坏1類	G0	灰原埋土1層	12.60	4.40	4.80	12.60	RSBF	57	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回糸
12	坏1類		表土	13.50	5.30	5.70	13.50	RSBF	63	ロクロ	ロクロ	ロクロ	静糸
13	坏1類	F0	灰原埋土1層	13.00			13.00	RSB		ロクロ	ロクロ	ロクロ	
14	坏1類		表土	11.70			11.70	RSB		ロクロ	ロクロ	ロクロ	
15	坏1類		灰原埋土	12.1			12.10	RSB		ロクロ	ロクロ	ロクロ	回糸
16	坏1類		灰原埋土	13.80			13.80	RSB		ロクロ	ロクロ	ロクロ	
17	坏1類	H4	灰埋土7層	12.20	4.20	4.40	12.20	RSBF	17	ロクロ	ロクロ	ロクロ	
18	坏1類	E1,H0	灰原埋土	11.9			11.9	RSB		ロクロ	ロクロ	ロクロ	
19	坏2類		表土	7.00				RSB		ロクロ	ロクロ	ロクロ	
20	坏2類	G1,H1	灰原埋土1層	8.20	4.90	5.00	8.20	RSBF	59	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ナデ
21	皿1類		灰原埋土1層	11.40			11.40	RNSB		ロクロ		ロクロ	
22	皿2類	G-1	灰原埋土1層	10.40	1.80	5.00	10.40	RSBF	91.5	ロクロ		ロクロ	回糸 ケズリ
23	皿2類		灰原埋土1層	11.00	2.20	4.60	11.00	RSBF	42.5	ロクロ		ロクロ	回糸
24	皿2類		灰原埋土1層	8.50	1.70	4.20	8.40	RSBF	75	ロクロ		ロクロ	ケズリ
25	皿2類		灰原埋土1層	10.00	2.70	5.50	10.00	RSBF	77	ロクロ		ロクロ	回糸
26	皿2類		灰原埋土1層	9.80	1.70	4.20	9.80	RSBF	18	ロクロ		ロクロ	ケズリ
27	蓋1類		表土	10.40			10.40	RSB		ロクロ		ロクロ	
28	蓋1類	G3	灰原埋土1層	10.60			10.60	RS		ロクロ		ロクロ	
29	蓋1類	H0	灰原埋土1層	9.00			9.00	RSB		ロクロ		ロクロ	
30	蓋2類	H-1	灰原埋土1層	12.00	2.50	5.50	12.00	RSBT		ロクロ		ロクロ	回糸
31	ミナフ		表土			3.60		BF		ロクロ			回糸
32	ミナフ		表土			3.00		BF		ロクロ			回糸

内面調整				色調	胎土	焼成	備考
口頸部	体部上半	体部下半	底部				
ロクロ	ロクロ		ロクロ	黄灰色	石英、中礫	還元硬質	ヘラ記号
ロクロ	ロクロ		ロクロ	灰色	小礫、石英、	還元硬質	ヘラ記号、自然釉付着
ロクロ	ロクロ		ロクロ	黄灰色	石英、細礫	還元硬質	緋瘻痕
ロクロ	ロクロ		ロクロ	灰オリーブ色	石英、海綿骨針、小礫	還元硬質	ヘラ記号
ロクロ	ロクロ		ロクロ	黒褐色	石英、中礫、海綿骨針	還元硬質	ヘラ記号
ロクロ	ロクロ		ロクロ	暗赤褐色	石英、海綿骨針、小礫	還元硬質	ヘラ記号
ロクロ	ロクロ		ロクロ	灰色	石英、中礫	還元硬質	緋瘻痕
ロクロ	ロクロ		ロクロ	灰色	海綿骨針、小礫	還元硬質	緋瘻痕
ロクロ	ロクロ		ロクロ	灰色	石英、小礫	還元硬質	緋瘻痕、自然釉
ロクロ	ロクロ		ロクロ	灰色	石英、海綿骨針、小礫	還元硬質	
ロクロ	ロクロ		ロクロ	灰色	石英、海綿骨針、小礫	還元硬質	緋瘻痕
ロクロ	ロクロ		ロクロ	暗褐色	石英、中礫、海綿骨針	酸化軟質	ヘラ記号、緋瘻痕
ロクロ	ロクロ			暗褐色	石英、海綿骨針、小礫	還元硬質	緋瘻痕
ロクロ	ロクロ			黒褐色	石英、小礫、海綿骨針	還元硬質	ヘラ記号
ロクロ	ロクロ			にぶい黄橙色	石英、細礫	還元硬質	ヘラ記号、緋瘻痕
ロクロ	ロクロ			暗褐色	石英、海綿骨針、細礫	酸化軟質	ヘラ記号
ロクロ	ロクロ			浅黄色	細礫	還元硬質	ヘラ記号
ロクロ	ロクロ			暗赤褐色	石英、海綿骨針、小礫	還元硬質	ヘラ記号
ロクロ	ロクロ			黒褐色	石英、小礫	還元硬質	ヘラ記号
ロクロ	ロクロ		ロクロ	赤色	石英、海綿骨針、小礫	酸化硬質	
ロクロ	ロクロ			橙色	石英、小礫	酸化軟質	
ロクロ	ロクロ		ロクロ	暗青灰色	石英、海綿骨針、中礫	還元硬質	
ロクロ	ロクロ		ロクロ	暗青灰色	石英、小礫	還元硬質	
ロクロ	ロクロ		ロクロ	暗青灰色	海綿骨針、細礫	還元硬質	ヘラ記号、緋瘻痕
ロクロ	ロクロ		ロクロ	褐灰色	石英、細礫	還元硬質	ヘラ記号、緋瘻痕、自然釉
ロクロ	ロクロ		ロクロ	灰色	石英、細礫	還元硬質	自然釉
ロクロ	ロクロ			灰色	石英、海綿骨針、小礫	還元硬質	
ロクロ	ロクロ			灰色	石英、小礫	還元硬質	
ロクロ	ロクロ			灰色	海綿骨針、小礫	還元硬質	
ロクロ	ロクロ			灰色	海綿骨針、小礫	還元硬質	
ロクロ	ロクロ		ロクロ	橙色	石英、海綿骨針、小礫	酸化軟質	
	ロクロ		ロクロ	灰褐色	小礫	還元硬質	自然釉
	ロクロ		ロクロ	黒褐色	細礫	還元硬質	

第6表 遺物観察表(2)

遺物 番号	器種	グリッド	層位	法量				残存部	残存率	外面調整			
				口径	器高	底径	最大径			口頸部	体部上半	体部下半	底(天井部)
33	鉢1類	H0	灰原埋土1層	0.70	7.20	5.50	10.80	RNSBF	85	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ケズリ
34	鉢1類	F1, G1・3	灰原埋土1層	10.50	7.40	4.40	10.50	RNSBF	51	ロクロ	ロクロ	ロクロ	不明
35	鉢2類	H3・5	灰埋土10・11層	13.10	11.50	7.00	14.70	RNSBF	53	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回糸
36	鉢1類	I4	A灰床面	12.60	11.20	6.30	13.70	RNSBF	80	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回糸
37	鉢1類	F0,1, I1,10	灰原埋土2層	11.10	10.00	7.30	13.50	RNSBF	62	ロクロ	ロクロ ケズリ	ケズリ	ケズリ
38	鉢2類	H0	灰原埋土1層	13.60	11.10	6.20	14.20	RNSBF	80	ロクロ	ロクロ ケズリ	ケズリ	ケズリ
39	鉢1類	G2	灰埋土8層	11.40			12.50	RNSB		ロクロ	ロクロ	ケズリ	
40	鉢2類	H3	灰埋土9層	12.60			14.20	RNS		ロクロ	ロクロ		
41	鉢2類	H0	表土	12.20				RNS		ロクロ	ロクロ		
42	鉢1類	H1	灰原埋土1層	13.20				RNS		ロクロ	ロクロ		
43	鉢2類		表土	10.00			10.30	RNS		ロクロ	ロクロ		
44	鉢1類	G1	灰埋土1層	13.40				RNS		ロクロ	ロクロ		
45	鉢2類	H3	灰埋土7層	13.40			14.70	RNSB		ロクロ	ロクロ	ロクロ	
46	鉢3類	H3	灰埋土9層	12.60	9.80	7.00	12.60	RNSBF	35	ロクロ	ケズリ	ケズリ	ケズリ
47	鉢1類	H4	B灰床面	9.60				RNS		ロクロ	ロクロ		
48	長頸壺	G0, H0,1	灰原埋土1層	10.20			17.00	RNSB		ロクロ	ロクロ	ケズリ	
49	長頸壺	F0,G1	灰原埋土1層	10.90				RNSB		ロクロ	ロクロ	ケズリ	
50	長頸壺	D1,E0, G2,H3	灰埋土15層	9.40	25.20	8.10	17.40	RNSBF	48	ロクロ	ケズリ	ケズリ ナデ	ケズリ
51	長頸壺		灰原埋土1層	11.00			18.80	RNSB		ロクロ	ロクロ	ケズリ	
52	長頸壺	H0,1	灰原埋土1層	8.80	24.80	9.00	18.60	RNSBF	83	ロクロ	ロクロ	ケズリ	ケズリ
53	長頸壺	D1,F0	灰原埋土1層	9.80				RNS		ロクロ	ロクロ		
54	長頸壺	I3	灰埋土10層	8.60				RN		ロクロ			
55	長頸壺	H0	灰原埋土1層	7.40				RNS		ロクロ	ロクロ		
56	長頸壺	G2	灰埋土8層	7.60				RN		ロクロ			
57	長頸壺	E0	灰原埋土1層	13.40				RN		ロクロ			
58	長頸壺		灰原埋土1層	10.60				RN		ロクロ			
59	長頸壺	E0,F1	灰原埋土1層	10.00				RN		ロクロ			
60	長頸壺	H4	灰埋土19層	6.70				RN		ロクロ			
61	長頸壺	F0	灰原埋土1層	11.00				RN		ロクロ			
62	長頸壺	F1	灰原埋土1層	10.50				RN		ロクロ			
63	長頸壺	H3	灰埋土3層	10.40				RN		ロクロ			
64	長頸壺	H3	灰埋土19層	5.00				RN		ロクロ			

内面調整				色調	胎土	焼成	備考
口頸部	体部上半	体部下半	底部				
ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	灰色	石英、小礫	還元硬質	ハラ記号
ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	暗青灰色	石英、海綿骨針、小礫	還元硬質	ハラ記号
ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	灰色	石英、海綿骨針、小礫	還元硬質	
ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	灰色	石英、小礫	還元硬質	ハラ記号
ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	青灰色	石英、小礫	還元硬質	ハラ記号、自然釉
ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	暗青灰色	石英、小礫	還元硬質	ハラ記号、自然釉
ロクロ	ロクロ	ロクロ		灰色	石英、中礫	還元硬質	ハラ記号
ロクロ	ロクロ			暗青灰色	小礫	還元硬質	自然釉
ロクロ	ロクロ			黒褐色	石英、小礫	還元硬質	
ロクロ	ロクロ			灰色	石英、海綿骨針、細礫	還元硬質	ハラ記号
ロクロ	ロクロ			オリーブ黒色	小礫	還元硬質	
ロクロ	ロクロ			赤灰色	海綿骨針、細礫	還元硬質	耕摺痕、自然釉
ロクロ	ロクロ	ロクロ		暗青灰色	石英、細礫	還元硬質	ハラ記号
ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	褐灰色	石英、海綿骨針、細礫	酸化硬質	ハラ記号、穿孔、自然釉
ロクロ	ロクロ			青灰色	石英、海綿骨針、小礫	還元硬質	
ロクロ	ロクロ	ロクロ		明黄褐色	石英、海綿骨針、小礫	酸化軟質	ハラ記号
ロクロ	ロクロ	ロクロ		明黄褐色	石英、海綿骨針、小礫	酸化軟質	ハラ記号
ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	暗青灰色	石英、海綿骨針、小礫	還元硬質	ハラ記号、自然釉、輪摺痕
ロクロ	ロクロ	ケズリ		明赤褐色	石英、海綿骨針、細礫	酸化硬質	
ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	暗青灰色	石英、海綿骨針、小礫	還元硬質	ハラ記号
ロクロ	ロクロ			橙色	石英、海綿骨針、小礫	酸化軟質	ハラ記号
ロクロ				褐灰色	石英、細礫	還元硬質	ハラ記号、自然釉
ロクロ	ロクロ			赤灰色	石英、海綿骨針、小礫	還元硬質	自然釉
ロクロ				灰色	石英、小礫	還元硬質	
ロクロ				褐灰色	細礫	還元硬質	自然釉
ロクロ				黄灰色	石英、海綿骨針、細礫	還元硬質	ハラ記号、自然釉
ロクロ				黄灰色	石英、海綿骨針、細礫	還元硬質	自然釉、2次焼成
ロクロ				赤灰色	石英、海綿骨針、小礫	還元硬質	
ロクロ				灰赤色	石英、海綿骨針、小礫	還元硬質	自然釉
ロクロ				青灰色	石英、海綿骨針、細礫	還元硬質	
ロクロ				褐灰色	小礫	還元硬質	自然釉
ロクロ ユビナデ				灰色	石英、海綿骨針、小礫	還元硬質	

第7表 遺物観察表(3)

遺物番号	器種	グリッド	層位	法量				残存部	残存率	外面調整			
				口径	器高	底径	最大径			口類部	体部上半	体部下半	底(天井)部
65	長頸壺		灰原埋土1層	9.00				RN		ロクロ			
66	長頸壺		表土	10.00				RN		ロクロ			
67	長頸壺		表土			11.80		BF				ケズリ	ケズリ ユビナデ
68	長頸壺	H0	灰原埋土1層			9.60	19.70	SBF		ロクロ	ケズリ ロクロ	ケズリ ユビナデ	ケズリ ユビナデ
69	壺	H1,3	灰原1層,73層			10.80		F					ケズリ ユビナデ
70	壺		灰原埋土一括			11.20		F					ケズリ ユビナデ
71	壺	H0	灰原埋土1層			9.60		BF				ケズリ	ケズリ ユビナデ
72	広口壺1層	H0,1,3	灰原1層,74層	16.60	17.00	8.80	19.40	RNSBF	38	ロクロ	ロクロ	ケズリ	ケズリ
73	広口壺2層	E0,H1	灰原埋土1層	14.80			20.00	RNSB		ロクロ	ケズリ	ケズリ	
74	広口壺1層	H0,1	灰原埋土1層	19.30			20.80	RNSB		ロクロ	ロクロ	ケズリ	
75	広口壺1層	F0	灰原埋土1層	18.60			19.00	RNSB		ロクロ	ケズリ		
76	広口壺1層	H0,10	灰原埋土1層	18.40			22.50	RNSB		ロクロ	タタキ ロクロ	ケズリ	
77	広口壺2層	E0,H0,1	灰原埋土1層	12.80	20.50	8.40	19.60	RNSBF	38	ロクロ	ロクロ	ケズリ	ナデ
78	広口壺	H0	灰原埋土1層	13.20				RNS		ロクロ	ロクロ		
79	広口壺	E0	灰原埋土1層	13.80				RN		ロクロ			
80	広口壺	G1	表土	15.20				RN		ロクロ			
81	広口壺2層	F0	灰原埋土1層	17.00				RNS		ロクロ	ロクロ		
82	中甕	E0	灰原埋土	20.60				RNS		タタキ ロクロ	格子タタキ		
83	中甕	E0	灰原埋土	20.00				RNS		タタキ ロクロ	格子タタキ		
84	中甕	G2,H0	灰原埋土	21.20				RNS		タタキ ロクロ	格子タタキ		
85	中甕	E0	灰原埋土	21.00				RNS		タタキ ロクロ	格子タタキ		
86	中甕		表土	28.00				RN		タタキ ロクロ			
87	中甕	H1	灰原埋土					NS		タタキ ロクロ	格子タタキ		
88	中甕	F0,1	灰原埋土	23.00				RNS		タタキ ロクロ	格子タタキ		
89	中甕	I4	7床直			14.10		BF				平行タタキ	平行タタキ
90	中甕	F0	灰原埋土1層			22.80		BF				平行タタキ	平行タタキ ナデ
91	大甕		灰原埋土	51.80				RN		タタキ ロクロ			

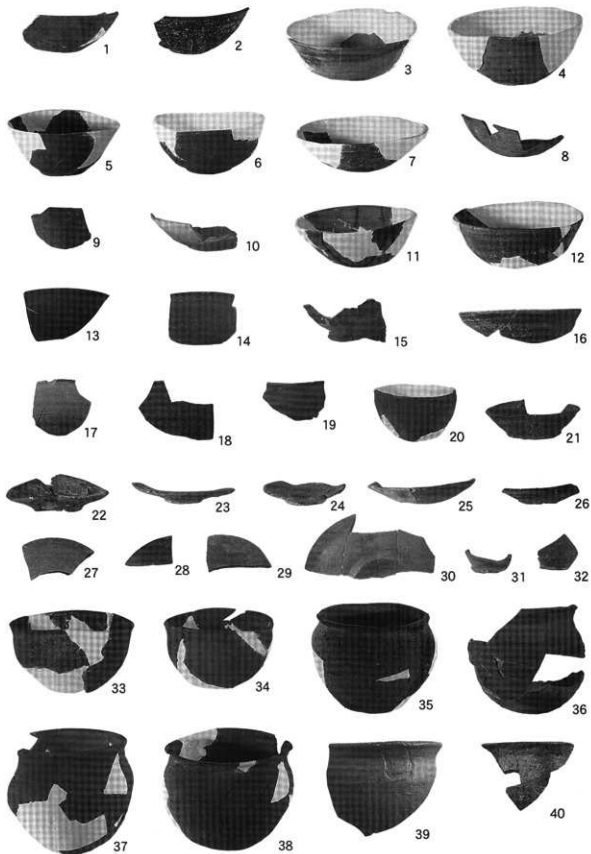
表中の記号について

1.表中の遺物番号は実測図の遺物番号と一致する。

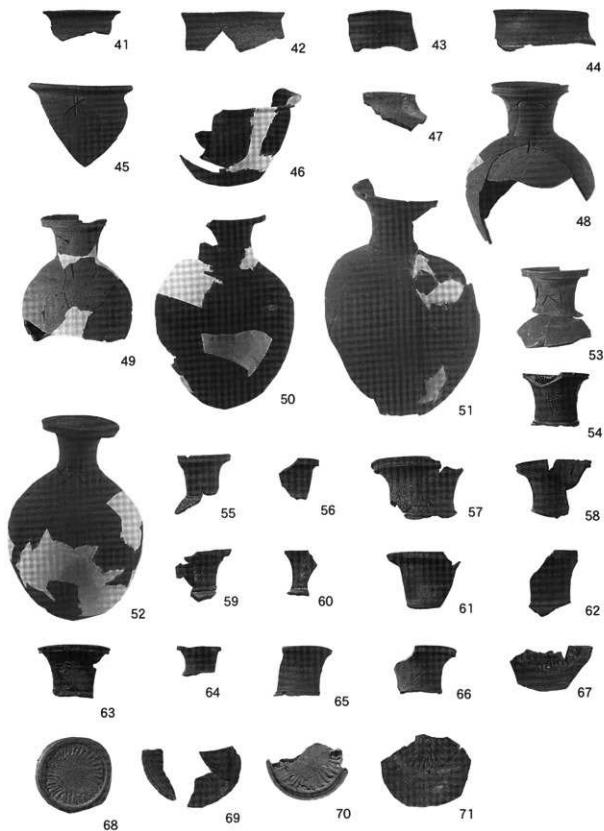
2.残存部位の略記号は次の通りであり、記号の組み合わせにより、残存部を示した。R：口縁部、N：頸部、S：体部上半、B：体部下半、F：底部、T：頂部（例：口縁部から体部下にかけて残存している部位：RNSB）

3.調整の記号は次の通りである。ロクロ：ロクロナデ調整、ユビナデ：指によるナデ調整、平行タタキ：同一方向によるタタキ調整、格子タタキ：格子目状に異方向からのタタキ調整、面糸：回転糸切痕、静糸：静止糸切痕

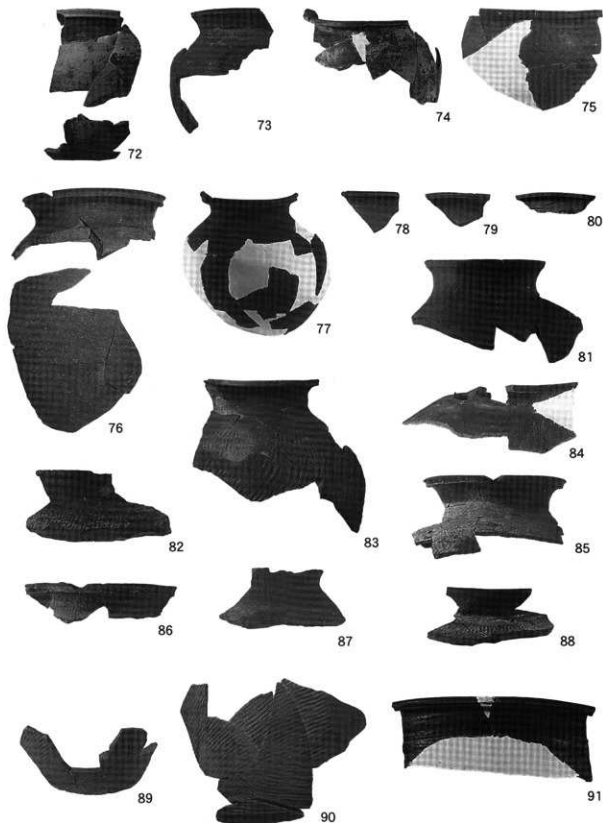
内面調整				色調	胎土	焼成	備考
口頭部	体部上半	体部下半	底部				
ロクロ				灰色	細礫	還元硬質	
ロクロ				灰色	石英、小礫	還元硬質	ヘラ記号
		ロクロ	ロクロ	褐灰色	石英、海綿骨針、小礫	還元硬質	菊花文、砂底、自然釉
	ロクロ	ロクロ	ロクロ	暗緑灰色	石英、海綿骨針、小礫	還元硬質	菊花文、砂底
			ユビナデ	明赤褐色	石英、海綿骨針、小礫	酸化硬質	菊花文
			ユビナデ	にぶい黄褐色	石英、海綿骨針、小礫	酸化硬質	菊花文
		ナデ	ユビナデ	暗青灰色	石英、海綿骨針、小礫	還元硬質	菊花文、砂底
ロクロ	ロクロ	ロクロ	ナデ	灰白色	石英、海綿骨針、中礫	還元軟質	
ロクロ	ロクロ	ナデ		暗赤灰色	石英、海綿骨針、中礫	還元硬質	
ロクロ	ロクロ	ロクロ		明黄褐色	石英、海綿骨針、中礫	酸化軟質	
ロクロ	ロクロ			暗青灰色	石英、中礫	還元硬質	
ロクロ	ナデ	ナデ		青灰色	石英、小礫	還元硬質	自然釉
ロクロ	ロクロ	ロクロ	ナデ	にぶい赤褐色	石英、海綿骨針、小礫	還元硬質	ヘラ記号、自然釉
ロクロ	ロクロ			灰色	石英、海綿骨針、小礫	還元硬質	
ロクロ				暗赤褐色	石英、海綿骨針、小礫	還元硬質	
ロクロ				灰色	石英、海綿骨針、小礫	還元硬質	ヘラ記号
ロクロ	ロクロ			赤褐色	石英、海綿骨針、小礫	酸化軟質	
ロクロ	ロクロ			緑灰色	石英、海綿骨針、中礫	還元硬質	
ロクロ	無調整			暗青灰色	石英、海綿骨針、小礫	還元硬質	
ロクロ	無調整			暗緑灰色	石英、海綿骨針、小礫	還元硬質	ヘラ記号
ロクロ				灰色	石英、海綿骨針、小礫	還元硬質	
ロクロ				暗青灰色	石英、海綿骨針、小礫	還元硬質	
ロクロ	無調整			暗緑灰色	石英、海綿骨針、小礫	還元硬質	ヘラ記号
ロクロ	ナデ			黄灰色	石英、中礫	還元硬質	
	無調整		ナデ	赤褐色	石英、海綿骨針、小礫	酸化硬質	平底
	無調整		ケズリ ナデ	橙色	石英、海綿骨針、小礫	酸化軟質	平底
ロクロ				灰色	石英、海綿骨針、小礫	還元硬質	



写真図版 1 M Z 6号窯出土遺物(1) (図中の番号は実測図と対応)



写真図版2 MZ6号窯出土遺物(2) (図中の番号は実測図と対応)



写真図版3 MZ6号窯出土遺物(3) (図中の番号は実測図と対応)



1、MZ6号窯確認面



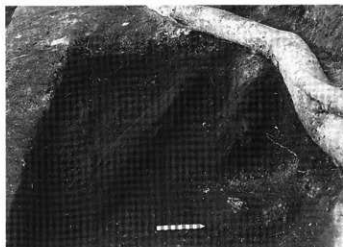
3、天井崩落土検出状況



2、MZ6号窯土層断面図



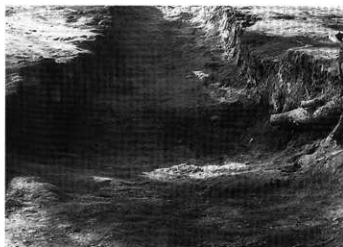
4、A・B窯燃烧部



5、炭化材出土状況



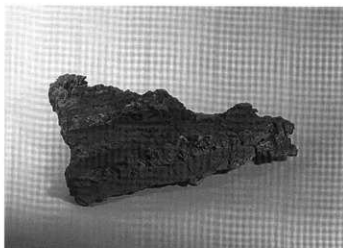
1、作業風景



3、A窯燃焼部完掘状況



2、A窯燃焼部断割状況



4、天井懸架材痕のみえる窯壁



5、須恵器壺破片付着窯壁

発掘調査抄録

ふりがな	えむぜつとろくごうかまあと						
書名	MZ6号窯跡						
副書名	隠川(1)遺跡内に所在する須恵器窯跡発掘調査報告書						
シリーズ名	五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	第23集						
編集者名	藤原 弘明						
編集機関	五所川原市教育委員会						
所在地	〒037-8686 青森県五所川原市宇岩木町12番地						
発行年月日	2002年3月20日						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査面積	調査期間
		市町村	遺跡番号				
隠川(1)遺跡	青森県五所川原市持子沢字 隠川695-4	02205	05-020	40度	140度	320 平方メートル	20010723
				44分 30秒	32分 48秒		~ 20010827
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
隠川(1)遺跡 (MZ6号窯)	窯跡	平安時代	須恵器窯跡 1基		須恵器 土師器 縄文土器	五所川原産須恵器操業 開始時期に近い窯跡と 考えられる。 使用していた燃料はブ ナ材であった。	

五所川原市埋蔵文化財調査報告書第23集

MZ 6号窯跡

隠川(1)遺跡内の須恵器窯跡発掘調査報告書

平成14年3月発行

発行 五所川原市教育委員会

〒037-8686 五所川原市宇岩木町12番地

印刷 五所川原印刷株式会社

〒037-0073 青森県五所川原市宇柳町8番地

